神奈川大学21世紀COEプログラム
人類文化研究のための非文字資料の体系化
Systematization of Nonwritten Cultural Materials for the Study of Human Societies

ISSN 1348-8139

News Letter 2008.3 No.19

非文字資料研究

The Study of Nonwritten Cultural Materials

Information

COE

調査研究資料第5号

「澁澤写真」に見る 1935～1936年の喜界島

“The Shibusawa Photograph Collection”of Kikai Island — The Ordinary Lives of Islanders in 1935/1936

2008年2月発行　A4判　85頁

●編集：「人類文化研究のための非文字資料の体系化」第3班

研究成果報告書

日本近世生活絵引　北海道編

Pictopedia of Everyday Life in Early Modern Japan compiled on Southern Hokkaido

2007年12月発行　A4判　116頁

●編集：「人類文化研究のための非文字資料の体系化」第1班

東アジア生活絵引　中国江南編

Pictopedia of Everyday Life in East Asia compiled on South of the Yangzi River, China

2008年2月発行　A4判　147頁

●編集：「人類文化研究のための非文字資料の体系化」第1班

非文字資料研究の可能性 —若手研究者研究成果論文集

Possibilities on the Research of Nonwritten Cultural Materials — Articles of Research Results from Junior Researchers

2008年3月発行　A4判　274頁

●編集：神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究推進会議

※上記以外にも研究成果報告書を刊行予定です。詳しくはP14～16のCOE刊行物リストをご覧ください。
※すべての発行主体は神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議

歴史民俗資料学研究科
Graduate School of History and Folklore Studies

『歴史民俗資料学研究』第13号

2008年3月発行　A5判　367頁

●発行：神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科

●内容：道修町と神農祭—都市同業組織の信仰（小林公子）、横浜専門学校における報国団と報国隊（齊藤研也）、柳田國男『新國学談』のころ—民俗学が背負った戦後日本の神道論その壱—（坂井美香）、雄弁家としての永井柳太郎—四つの演説論の分析を中心に—（高野宏康）、王禎『農書』唐箕絵図の解説—開放型先行説批判（内藤大海）、第二次世界大戦後の中国における日赤従軍看護婦—旧満州を中心に—（山田ノリ子）、建築史学と博物館—1970年前後の国立施設への志向（今井功一）、木造船の水漏れを防ぐ技術—昆布を使う技術はどのように福島県只見町に伝播したか—（及川晃一）、都城における木刀生産業の成立過程について（對馬陽一郎）、神社の祀り・長床（ながどこ）における「献饌」行事—子孫に伝えんとする記録—（白井正子）、ティツィング『日本風俗図誌』（1822）掲載の二点の火山噴火図について（北原糸子）、書評「半澤健市著『財界人の戦争認識—村田省蔵の大東亜戦争—』［歴史民俗資料学叢書2、2007年3月刊行］」（高野宏康）

外国語学研究科　中国言語文化専攻
The Course of Chinese Language and Culture, Graduate School of Foreign Languages

『神奈川大学大学院　言語と文化論集』第14号

2008年2月発行　A5判　171頁

●編集・発行：神奈川大学大学院外国語学研究科

●内容：《牡丹亭》中叹詞探析（刘海燕）、現代中国語における使役構文の意味と論理構造—その二「V得構文」—（温琳）、日本人学生の言語評価—神奈川大学で行った予備調査に基づいて—（宮本大輔）、English filler *you know*: an approach from relevance-theoretic account（山田大介）、簡素化使用域としての「野球トーク」—社会言語学的考察—（石黒敏明）

各研究所・研究科　問合せ

刊行物や催し物については該当する各所にお問合せください。

045-481-5661（代）

●日本常民文化研究所（内線4358）　●歴史民俗資料学研究科（内線4024）
●中国語共同研究室（内線4525）　●COE支援事務室（内線3532）

非文字資料研究 No.19

発　行　日　第19号　2008年3月31日 発行
編集・発行　神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究推進会議
The Kanagawa University 21st Century COE Program Center
Systematization of Nonwritten Cultural Materials for the Study of Human Societies
〒221-8686　横浜市神奈川区六角橋3-27-1
■Tel.045-481-5661　■Fax.045-491-0659　■URL http://www.himoji.jp/

非文字資料研究
The Study of Nonwritten Cultural Materials
News Letter 2008.3 No.19

CONTENTS

ご挨拶
神奈川大学21世紀COEプログラムの歩みを振り返る
世界に、そして未来へ …… 3
中島　三千男　NAKAJIMA Michio（神奈川大学学長）
再びの幕開けに向けて …… 4
池上　和夫　IKEGAMI Kazuo
（神奈川大学副学長・神奈川大学21世紀COEプログラム拠点形成委員会委員長）

REPORT 訪問・派遣研究員によるレポート
1 「ベルダーシュ」―異性装から「異装」研究へ― …… 5
國弘　暁子　KUNIHIRO Akiko
2 日中民俗学交流のひとこま …… 6
―何思敬とThe Handbook of Folkloreの中国導入―
王　京　WANG Jing
3 「日本国図」から見た鄭若曾の日本認識 …… 8
許　海華　XU Haihua
4 対照的な日本 …… 9
唐沢　ダニエラ　KARASAWA Daniela
5 心はウチナンチュ …… 10
グラウジョール・カルロス　GLAUJOR Carlos
6 龍動と地震 …… 11
蒋　明智　JIANG Mingzhi

COEメンバーリスト …… 12
COE刊行物リスト …… 14
海外提携研究機関との若手研究者交流実績
派遣研究員 …… 17
訪問研究員 …… 17
若手研究者業績 …… 19
ホームページの更新について …… 25
2007年度　外部評価の実施 …… 26
非文字資料研究 News Letter バックナンバー総目次 …… 27
受贈資料一覧 …… 32
主な研究活動 …… 32
第3回　COE国際シンポジウム　開催報告 …… 33
第3回　COE国際シンポジウム …… 34
プレシンポジウム　若手研究者ワークショップ
「手段としての『非文字』―資料と方法のあいだ―」を終えて
王　京　WANG Jing
彙報 …… 35
Information …… 36

表紙説明

最終号の表紙の絵は2007年度の海外提携研究機関訪問研究員の西村真志葉さん（北京師範大学文学院　右は自画像）の手によるものです。彼女のレポートは18号に載っていますが、18号の何点かのさし絵も彼女のものです。西村さんありがとうございました。（なお31ページのカットは1935年のアチックミューゼアムの朝鮮半島調査の折のもの。日本常民文化研究所所蔵）。

（香月　洋一郎）

神奈川大学21世紀COEプログラムの歩みを振り返る

ご挨拶

世界に、そして未来へ

神奈川大学学長　中島　三千男
NAKAJIMA Michio

神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」が、大きな成果を残して5年間の活動を閉じようとしていることに対して、大変感慨深いものがあります。と申しますのも、私は、このCOEプログラムが採択された2003年、当時の学長であった山火前学長の下で、本学の研究活動を担当する副学長として、21世紀COEプログラム拠点形成委員会の委員長に就任、COEプログラムの活動と本学の他の活動をつなぐ役割を4年ほど務めました。また、それだけではなく、昨年4月、学長に就任するまで、私自身、事業推進担当者の一人として、4年間にわたってこの活動に直接携わっていたからです。

このCOEプログラムは文部科学省が国際的競争力のある大学を作り上げるために、世界的な研究教育拠点を形成しようとして始めた国家的プロジェクトでありました。神奈川大学のCOEプログラムは、この5年間の活動の成果として最終（本）年度に公刊するものだけでも、「関東大震災写真データベース」など多数のデータベース、『マルチ言語版　絵巻物による日本常民生活絵引』（第1巻）他17冊の研究成果報告書など、多数にのぼり、文部科学省の期待に十分に応えるものであったと確信しております。

しかし、私はこの5年間のCOEプログラムの活動の中で最大の成果は、神奈川大学と世界の研究機関との間で、未来を担う若手の研究者たちの交換が出来たことであると考えております。中国、韓国、カナダ、ブラジルの8研究機関からこの4年間に24名もの若手研究者を招聘、また逆にそれらの機関にこの4年間に、本プログラムのPDやRAを中心に13名を派遣して調査研究活動に従事してもらいました。神奈川大学が世界的な研究拠点として世界に、そして未来へ羽撃いていく上で大きな財産を築いたものと考えております。

COEプログラムは本年度で終了するわけですが、その活動は「神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センター」に受け継がれて行きます。大学としても、引き続きその活動に対して全面的な支援を行っていく決意です。また、そのことによって本学を「個性輝く大学」「国際競争力のある大学」にしていきたいと考えております。

最後になりましたが、5年間の本学のCOEプログラムに関わっていただきました、国内外の多くの皆様方、お一人ひとりに対して、深甚の謝意を表させていただきます。

神奈川大学21世紀 COEプログラムの歩みを振り返る

ご挨拶

再びの幕開けに向けて

神奈川大学副学長
神奈川大学21世紀COEプログラム拠点形成委員会委員長
池上 和夫
IKEGAMI Kazuo

「人類文化研究のための非文字資料の体系化」プログラムもこの3月で終了することとなりました。まずは、この5年間のご努力・ご協力に対して、リーダーの福田アジオ教授をはじめとする関係各位に厚く感謝申し上げます。

現在、「研究成果報告書（総括編）」の編集など、その最終的な取り纏めが精力的に行われているところであります。今後は、その成果を発展的に継承するため、引き続きグローバルCOEプログラムに申請いたしました。このグローバルCOEは、周知のごとく、申請時には、学長を中心としたマネジメント体制による指導力のもと、大学の特色を踏まえた将来計画と強い実行力により国際的に卓越した教育研究拠点を形成する計画であり、同時に教育研究拠点としての継続的な教育研究活動が自主的・恒常的に行われることが期待できる計画であるかどうかなどが問われます。つまり、当事業は、単なる研究プロジェクトではなく、独創的、画期的な研究基盤を前提に、高度な研究能力を有する人材育成の機能を持つ「人材育成の場」を形成するものでなければなりません。

それゆえ、その申請にも関連して、本プログラムの成果を発展的に継承し、日本常民文化研究所に付置されるプログラムの後継拠点としての非文字資料研究センターの充実を図っていかなければならないと考えています。当センターは、採択時の申請書でもプログラム終了時に研究を継承発展していく拠点として位置づけられており、センターを基盤として、特に歴史民俗資料学研究科と協働しながら優れた若手研究者の育成に引き続き取り組んでいく事が強く求められています。

幸いにして、これまでに、外部評価委員の方々からは、今後、我々が真摯に取り組まなければならない厳しいご批判とともに、プログラムの中核を担った日本常民文化研究所に対しては、「まさに歴史民俗資料学の至極の宝庫であり、世界的に見ても最高水準の研究所である」という評価や、「神奈川大学の誇るべき『戦略的資産』である」とのお言葉もいただき、意を強くしたところでもあります。また、「私立大学として、これだけ充実した研究活動を行っているところは数少ないので、大学側も経営の戦略拠点として、援助や協力を惜しまないことを期待したい」という評価委員のご助言も、大学運営の「選択と集中」の時代にあって、本学の特徴を活かす意味においても、肝に銘じなければならない指摘であると思います。

尚、本年9月には本プログラムの最終的な事後審査が行われます。現在の拠点形成委員会は、さしあたり、プログラムが終了してもその時期までは継続しますので、今後とも関係各位をはじめとする皆様方のご協力をお願いする次第であります。

「ベルダーシュ」―異性装から「異装」研究へ―

國弘 暁子（COE研究員・PD） KUNIHIRO Akiko

2007年の秋、神奈川大学COE若手研究員派遣制度を利用して、カナダのブリティッシュ・コロンビア大学（UBC）を訪問した。その目的は、カナダにおけるファースト・ネイションズ First Nations（先住民）* の中で、他の人々と異なる衣装を纏う「ベルダーシュ *berdache*」に関する研究動向を知ることであった。衣を纏うという「ベルダーシュ」の営為に焦点を当てた研究を行い、インドのヒジュラに関する事例を交えて、人類文化における「異装」の意義を見出すことができないかと考えている。

「ベルダーシュ」とは、西洋の探検家たちが発見した、北米先住民の特殊なジェンダー・カテゴリーであり、異性の衣装を纏って、異性の役割を担う人々を意味していた。その語源は、男性同士の性交における受身役を意味するアラビア語の*bardag*にあり、それがヨーロッパ諸言語に取り入れられ、そのうちの一つ、フランス語の*bardache*が後に英語の「ベルダーシュ *berdache*」になった［Fulton & Anderson 1992:603］。先住民の間では、ナードル *nadleeh*（ナバホ族）、ラマーナ *lhamana*（ズニ族）というように、部族ごとに異なる名称が用いられるが、アメリカの人類学的研究では、それらの総称としての「ベルダーシュ」が定着し、「同性愛、両性具有、異性装、トランスジェンダーのすべてを包含する語として使用」されてきた［Jacobs & Thomas 1999:92-93］。

「ベルダーシュ」という語の成立過程を問題視する研究者は、侮蔑的な性カテゴリーとしての「ベルダーシュ」を使用することを避け、先住民の間における伝統的役割をより適切に示す「男・女 Man-Woman」役割と表現する［Fulton & Anderson 1992:604］。また、「二つの精神を備えた人々 Two-Spirited People」という表現も普及するが、それは、男性と女性の両方の特徴を備えた人々を指す汎先住民用語を英語で表現したものとされる［http://www.mcgill.ca/interaction/mission/twospirit/］（2007年11月1日アクセス）。

このように「ベルダーシュ」は、名称を変えながらも、男性性と女性性の両方を併せ持った、もう一つのジェンダー役割、あるいはカテゴリーとして位置づけられてきたが、それらジェンダー・カテゴリーの繰り返しが、「ベルダーシュ」の宗教文化的側面を看過させた点は否めないだろう。「ベルダーシュ」は、男性性と女性性の双極を横断する存在であると同時に、人間界と自然界とを仲介する力も備えており、その両義性が先住民社会における地位を向上させるという指摘もある［Miller 1982:280］。「ベルダーシュ」の宗教文化的な両義性を前景化させるためには、近代的思考にもとづく性の分類様式を用いることなく、彼らの営為に着目したフィールドワークを実施して、先住民社会における「ベルダーシュ」としてのあり方を把握することが必要である。その取り組みとして、「ベルダーシュ」を異性装者と同定せずに、異質性を顕在化させる「異装」の反復行為とその意義に着目してみたい。

UBCキャンパス内のXwi7xwa Libraryに通じる螺旋階段上部の写真
階段を下ったところに、ファースト・ネーションズに関する文献を多数所蔵するLibraryがある。Xwi7xwa (whei-whaと発音) とは、ファースト・ネーションズ言語の一つ、Squamish語で "Echo" を意味する。

引用文献

- **Fulton, Robert, and Steven W. Anderson.** 1992, The Amerindian“ Man-Woman ”: Gender, Liminality, and Cultural Continuity, Current Anthropology, 33/5, pp.603-610.
- **Miller, Jay.** 1982, People, Berdaches, and Left-Handed Bears: Human variation in Native America, Journal of Anthropological Research, vol.38, no.3, pp.274-287.
- **Thomas, Wesley, and Sue-Ellen Jacobs.** 1999,“ ...And We Are Still Here ”: From Berdache to Two-Spirit People, *American Indian Culture and Research Journal* 23:2, pp.91-107.

＊1970年代より、カナダでは「インディアン」という名称の代わりとして「ファースト・ネイションズ」を使用するようになる。［http://www.aincinac.gc.ca/pr/pub/wf/trmrslt_e.asp?term=10/］（2007年11月16日アクセス）。

日中民俗学交流のひとこま
―何思敬とThe Handbook of Folkloreの中国導入―

王　京（COE研究員・PD）　WANG Jing

昨年の11月に筆者は本COEプログラムの派遣で、広州・中山大学を訪れた。中山大学の前身は、1924年孫文の提唱で創立された国立広東大学であり、孫が亡くなった1926年に彼を記念するために、その号である「中山」を取り入れて改名した。1952年に教会大学である嶺南大学の文理科を吸収してから、旧嶺南大学の所在地をキャンパスとしてきた。戦前、両大学はともに広州における学問の中心であり、中山大学は北京大学に継いで中国民俗学の中心地でもあった。戦前の中国における民俗学研究、教育状況の一端を探ることを目的とした今回の調査は、同大学の豊富な資料により多くの収穫を得たが、ここでは1920年代における日中民俗学交流のひとこまについて紹介していきたい。

周知のように、日本では民俗学の概説書として、1930年代半ば、柳田民俗学の確立を示す『民間伝承論』と『郷土生活の研究法』が有名であるが、最初の概説書といえば、岡正雄訳『民俗学概論』(1927年) であった。原書は1890年英国民俗学協会より刊行されたゴンム（G.L.Gomme）の“ The Handbook of Folklore ”を基礎に、1914年にバーン（C.S.Burne）によって大幅に増改訂された同名の著作である。

このバーンの著作は初期の中国民俗学にも多大な影響を及ぼしていた。外国の民俗学理論の導入の口火を切った楊成志・鍾敬文訳『印欧民間故事表』(1928年)、楊成志訳『民俗学問題格』（同年）は共にこのバーン著の部分訳であり、その後、中国学者による初の民俗学概論である林惠祥の『民俗学』（1931年）も同書をベースにしたものであった。

中国民俗学の歴史を積極的に研究、紹介した直江広治はかつて「日本でも岡正雄氏が初めて民俗学の概説書としてバーン女史の著書を訳したのが昭和二年であったから、中国ではそれから一年遅れて同じくバーン女史の概説書が紹介されたわけである。日本における翻訳と、中国のそれとは相互に関係はなく、別々に行われたものであるが、両国における初めての民俗学概説書としてバーン女史のものが、ほぼ同じくして現われたことは興味深い」(『中国の民俗学』1967年）とこの「偶然なる一致」に感無量であった。しかしこれは偶然ではなかった。

1928年3月の『民俗』週刊（中山大学語言歴史学研究所）創刊号から楊成志による“ The Handbook of Folklore ”の付録“ Questionary ”(「調査項目」）及び“ Terminology ”(「用語」) の訳文が計13回連載され、9月に単行本『民俗学問題格』として発行された。その冒頭に何思敬による序文（6月25日付）が飾られている。これを一読すれば、何思敬は即ち楊に原書を紹介し、且つ調査項目の翻訳を勧めた人物であったことがわかる。

実際、何は最初自分が翻訳して紹介することを考えていたらしい。『国立第一中山大学語言歴史学研究所週刊』（以下、『週刊』）最初の民俗学特集「風俗研究」(1-11・12合併号、1928年1月）では陳錫襄の「ある民俗学著作の紹介」という一文があり、管見の限り、これが中国におけるバーン著について最初の紹介である。そこで陳は「(付録の調査項目は）本来何思敬先生が翻訳の計画を持っていたものであるが、ご多忙でなかなか時間が取れなかった。筆者は待ちきれずにこの特集を機にその一部を訳して風俗調査の参考に資しようと思っていたが、結局とりあえず紹介することにした」と紹介に至るまでの経緯を説明し、原書を貸してくれた何に感謝のことばを捧げている。

何が「調査項目」の翻訳紹介にこだわったのは、社会科学としての民俗学の確立のために系統的な調査項目がもっとも役立つと判断してのことかと思われるが、実際“ The Handbook of Folklore ”からまず訳されたのは、前出、昔話のタイプ研究のための『印欧民間故事表』であった。共訳者の一人である鍾は1927年末に楊と一緒に原書を入手したと回想しており（「序文」エーベルハルト著、王燕生・周祖生共訳『中国民間故事類型』1999年)、何に紹介された可能性が大きい。

バーンの著作を中国に導入したこの何思敬はいったいどんな人物であろう。

民俗学では耳慣れないかもしれないが、何思敬（1896～1968）は中国共産党の党史では重要な人物で、法律家、哲学者、翻訳家として知られている（中共党史研究会編『中共党史人物伝』第44巻、1990年)。彼と民俗学との関わりは日本留学時代から始まったのである。

何思敬

何は浙江余杭の生まれで、13歳から上海に赴き、出版社、銀行などで働く。1912年に渡日し、京都で日本語の補習を受けた後、中等美術工芸学校で図案設計を学び、1915年に帰国して杭州にあるシルク工場で設計の仕事に従事していた。翌年春、再び日本に渡り、一高の予科を経て、1917年9月に二高に入学した。当時の同級生に2歳年下の岡正雄がおり、有賀喜左衛門と澁澤敬三が彼らの2年先輩にあたる。岡はかつて孫文の中国革命に感動し、東亜同文書院への進学も真剣に考えたこともある人物で、何とすぐに友人となった。1920年秋、何は中国政府の官費生となり、岡とともに東京帝大の文学部社会学科に進学し、二人の友情がさらに深まった。

1920年代初、日本社会は大きな変革期を迎え、民俗学においても柳田国男は「本筋の学問」の樹立に精力的な活動を展開していた。1924年に岡正雄は岡村千秋の紹介で初めて柳田を訪れ、以来信頼を得て度々柳田宅に出入りする。1925年4月、岡正雄は神奈川県高座郡藤沢町鵠沼に転居したが、当時大学院に進学した何思敬、そして社会学の田辺寿利や法制史の内藤吉之助なども近所に住んでおり、若者は「日夜交友」していたという（「岡正雄年譜」『異人その他』1979年)。

この年の11月に柳田の指導の下で、岡、田辺、石田幹之助、有賀喜左衛門ら若手研究者を中心に広義の人類学の雑誌『民族』が創刊された。恐らく岡の紹介で何思敬もしばしばその会合などに参加していた（「柳田先生追憶」『石田幹之助著作集4』1986年)。これについて柳田も「支那の学者では、我々が『民族』という雑誌を出していた昭和の初めに来て、社会学を勉強して帰った何思敬という人がいた…細君は支那大使館詰の人の娘で、実践女学校出身だそうで、日本婦人と全く変ったところがなかった」と回想している（「交友録　エリセーフ父子」『神戸新聞』1958年)。

同じ時期、中国民俗学も新しい段階を迎えた。北京大学ですでに1922年12月に『歌謡週刊』が創刊されたが、1925年10月、さらに国学門編輯室、歌謡研究会、方言研究会、風俗調査会、考古学会、明清史料整理会の合同発表機関として『北京大学研究所国学門週刊』が発刊された。

何思敬は当時東洋文庫の主事である石田幹之助を通してこれらの動きを知り、雑誌閲覧の便も得た（何思敬「読妙峰山進香専号」『民俗』1928年4月)。大いに感動した何は早速『民族』1-5（1926年7月）に「支那の新国学運動」(署名何畏）を投稿し、中国での新しい動向を、「自己の民族が歩み来つた真実の道程、民族の過去の生活、文化の真相を探究する要求」によって促され、「民族的研究を興し且つ民族学の特殊部門たる日本学の創生」が起きている日本での状況に重ねて紹介している。これが中国民俗学運動の日本への最初の紹介でもあった。

この紹介文を載せた『民族』が発行される7月、中国において全国を統一すべく広東国民政府による北伐戦争が始まった。その刺激で何は帰国を決め、1927年初学業を終え、法学院教授として中山大学に赴任した。

一方、北伐の影響で1926年秋、北洋政府が自由主義学風を提唱する蔡元培校長を更迭するのをきっかけに、多くの教授が北京大学を離れて南下した。その中には顧頡剛など民俗学運動の指導者も含まれていた。中山大学でヨーロッパの漢学に対抗し得る、中国人による中国研究の学術機関を構想した傅斯年が厦門大学から顧を招き、1927年11月に語言歴史学研究所を創立したが、同時にその下で顧を中心に中国で「民俗」を掲げた最初の学会組織「民俗学会」が結成された。

何思敬の帰国はちょうど中国民俗学の中心が北京大学から中山大学へ移り、民俗学理論に対する関心が高まり、組織化の活動が活発になった時代と巡り合い、彼は民俗学会の数少なき文学院以外からの会員であった（「民俗学会一年来の経過」『週刊』62-64合併号、1929年1月)。

何が帰国してまもなく日本では『民俗学概論』が出版されたが、その「訳者小序」では、岡正雄は「又何畏、樋口その他の友人諸君の厚志も併せてここに銘記したい」と記している。前より“ The Handbook of Folklore ”の存在と価値、そして岡訳の進行などを把握していた何は、民俗学会の成立を機にそれを会員に紹介し、そこでまず陳錫襄の紹介、それから岡訳を参考した楊成志と鍾敬文の翻訳があったと理解できる。

“ The Handbook of Folklore ”の中国導入の背後には、このように何思敬という人物を架け橋とした日中民俗学交流の知られざる一頁が隠されているのであった。

「日本国図」から見た鄭若曾の日本認識

許　海華（浙江工商大学日本語言文化学院教員）　XU Haihua

明代は中国における日本認識が飛躍的に拡大した時期である。東アジアの海上貿易が大いに発展した時代で、日本についての情報もこれまで以上に中国に流入するようになった。そして、嘉靖年間における倭寇問題の深刻化によって、対倭海防の参考を目的とする日本研究書が大量に撰述され、日本認識はにわかに深化してきたのである。

それらの研究書が中日関係史の研究にも史料的価値の高いものとして注目され、先学の研究で諸々論じ尽くされたのである。

本稿では、視点を史料の文字から画像に変え、明代の地理学者鄭若曾が作った「日本国図」に着目し、地図に映された日本認識を考察する。

1 鄭若曾と「日本国図」

鄭若曾は、字は伯魯、号は開陽であり、江蘇昆山人である。東南抗倭主将である総督胡宗憲に才能を買われ、その幕下にあって倭寇の対策に尽力した。『皇明分省地理志図考』、『海防一覧』、『万里海防図論』、『江防図考』、『黄河図議』、『海運図説』、『朝鮮図説』、『安南図説』、『琉球図説』、『江南経略』など幾多の労作があり、『日本図纂』と『籌海図編』が日本認識の水準を大きく高めた著書とされている。

『日本図纂』の序によると、その成立は嘉靖40年（1561）5月であるが、『籌海図編』の成立を茅坤の序により嘉靖41年3月とすれば、両者の編纂期間にはわずか10ヶ月の隔たりしかなく、時間上の親近性が指摘される。『籌海図編』の日本研究は大体巻之二に集中しているが、この部分と『日本図纂』をよく比較してみると、『籌海図編』の日本研究の部分は、ほとんど『日本図纂』からそのまま写されているが、ただ「市泊」から「附日本貢使詩」までの項目は『籌海図編』にとられていないことがわかる。

先学の諸研究に指摘があることだが、『日本図纂』に載せられた「日本国図」と『籌海図編』の巻之二のそれはほとんど同一のものである。筆者の調べでは、嘉靖40年（1561）に成立した『万里海防図論』にある日本国図は方向も、形も文字もほぼ同じもののように考えられる。つまり、「日本国図」が仕上げられたのは遅くとも嘉靖40年であったという推定が妥当ではないだろうか。

なお、元代の朱思本の完成した『広輿図』を、明代に至って羅洪先が整理したものに、さらに浙江布政使胡松が日本に関する新しい研究を付加し、嘉靖40年に『広輿図』が復刻された。この嘉靖版『広輿図』には、「昆山鄭子若著」と署名のある「日本図」が載せられている。「昆山鄭子若」はすなわち鄭若曾である。ゆえに、『日本図纂』が刊行された同年に、「日本国図」がもう胡松に知られ、「日本図」の名称で『広輿図』に転載されたことがわかる。

2 「日本国図」に描かれた日本

文字より画像資料の直観性と情報の豊富さからみると、「日本国図」は日本に関する知識の導入に貴重な資料であったと思われる。嘉靖初年に定海の薛俊が編纂した『日本考略』に載せられた「日本地理図」と比較すれば、「日本国図」に含まれる日本知識はかなり進んだことがわかる。

さらに「日本国図」においてどの程度日本が認識されたかを明らかにするために、天正17年（1589）写『拾芥抄』所載の「大日本国図」と対照して考察することにした。「大日本国図」に描かれた日本と比較した結果は、「日本国図」に描かれていないのは「讃岐」一国だけで、地名で誤記されたのは「相摩」（相模）、「甲裴」（甲斐）、「飛弾」（飛騨）、「若佐」（若狭）、「太和」（大和）、「丹渡」（丹波）、「摂摩」（播磨）、「伯岐」（伯耆）、「炎路」（淡路）、「伊岐」（壱岐）の十箇所である。一歩進んで諸国が所領した郡の数を比べてみると、郡の数が完全に一致しているものは少なくとも35あり（はっきりしない印刷の場合、計算に入れず）、正確さは50パーセント以上に達する。また、地域によって正確さが違い、「西海道」が最も高く、「山陽道」は2位である。

ほかに、「日本国図」を全体的に見ると、各地域に関する情報の量にもかなりの差があることがわかる。東山道、北陸道、東海道、畿内地方は、ほとんど国名と所領郡数しか描かれておらず、国の形や相互位置の誤りも珍しくないが、これにたいして、西海道・山陽道の国々に関する知識は詳細で客観性の高いことが見られる。

この情報の「西詳東略」は、鄭若曾の日本知識が嘉靖34年に「宣諭日本」した蔣州・陳可願の見聞によるところが多かったことから解釈できる。明史・日本伝、胡宗憲列伝により、大友義鎮・大内義長に倭寇鎮撫を要請することを目的とし、蔣州・陳可願は豊後・山口に赴いたのである。「西海道」と「山陽道」に関する情報が特に豊富である原因は、経験者の見聞によるからではないか。

3 「日本国図」の影響

『籌海図編』が後世の日本研究に大きく影響を与えたように、「日本国図」は後の多数の日本研究書に収められた日本図に継承された。管見に入ったものだけで、李言恭『日本考』の「日本国図」、侯継高『全浙兵制附日本風土記』の「日本国図」、蔡逢時『温処海防図略』の「日本倭島図」、章潢『図書編』の「日本国図」、茅瑞徴『万暦三大征考』の「日本図」などがあるが、中には原図の南北を逆転してそのまま転載したのもある。この点だけ見れば、鄭若曾の「日本国図」は明代における日本図の「決定版」といえるほど、後世から重視され、参考とされた画像資料であるように考えられる。

（許海華氏は2007年10月10日〜23日まで訪問研究員として来日された。）

対照的な日本

唐沢　ダニエラ（サンパウロ大学大学院　日本語・日本文学・日本文化修士課程）　KARASAWA Daniela

初めての飛行機、初めての海外。2006年12月の日本での2週間は大きな発見と神奈川大学COEプログラムへの感謝で一杯の期間であった。

幼少の頃より、私は常に日本についての本や雑誌に触れ、リベダルーデ（自由）という東洋人地区の日本人のお婆さんたちの話を聞いていた。そのミュージカルのような言語は魅惑的であったが、一音もわからなかった。大学の日本文学科に進学してはじめて、幼少時に耳にしたミュージカルの魅力を理解し、また今回の日本への旅でさらに新しい発見ができた。それは進歩的集中的な学習による、この素晴らしい言語の細かいニュアンスであった。

1 漫画のグローバル化（グローバリゼーション）

筆者が行っている研究は漫画のグローバル化とそのブラジルにおける影響、また青少年に対する社会的、商業的様相についてである。私は、2005年半ばに始めたこの研究を2006年末に修了し、日本文化研究の修士号を取得する予定である。

しかしブラジル社会の中にある漫画と日系人のブラジルにおける位置を語ることは複雑であるし、ブラジルの伝統文化から離れたものである。ブラジルが日本からどんなに多様な品々を大量に輸入する時代になっても、漫画は数十年来日系人だけのものであった。つまり、日系人と何らかかわりを持たないブラジル人には日本語が読める人は少なく、またポルトガル語ができない書店の老店主と会話ができる人もいなかったからである。

90年代に入ってやっと、ブラジル国内で非日系人への漫画販売が拡大していく。ポルトガル語訳版の普及により、日本語が理解できなくても、漫画に興味を持った人が漫画本を買い集めるようになったのだ。

ブラジル文化のもう一つの特徴は、新しいトレンドや行動に対して、海外での成功を待って見解を決める傾向があるということである。ブラジル企業はフランスやアメリカなどでの漫画の成功を待ったのち、このジャンルの娯楽の可能性を信じるようになる。

最近ブラジルでは、漫画というものは宣伝や出版業界でよく見られるように、「コミック」が美術の概念に含まれるようになった革命と見なされており、ブラジルの若者の日本美術の概念に対する注目は漫画とアニメに端を発するものである。

2 「ホーム」のイメージ

「お帰りなさい、ご主人様とお嬢様」我々はこの家庭的な挨拶により秋葉原のメイドカフェに迎え入れられた。現代の日本のポップカルチャーの象徴の一つであるこの類の店は、客に「ホーム」や「帰宅」の感覚を提供してくれる。初めて体験する外国人にとってはとても奇異な印象で混乱させられるが、数分後にはよく理解することができた。こういうもてなし、演技、その全てが軽い愛撫を持つ雰囲気をつくるためにある。メイド達はとてもフレンドリーで、笑顔を絶やさず、そのコスチュームと同じく実際の家族、妹分のようである。

メイドカフェは今回の旅の中で最も衝撃的なイメージの一つであった。その思わぬ光景、ヨーロッパのメイド仮装とアットホームな雰囲気に、世界的に反映し拡大する、多様な日本ビジネスの哲学を感じ取ることができた。（唐沢ダニエラ氏は2006年12月2日〜12月18日まで訪問研究員として来日された。）

＊本稿は英語で提出されたものをジョン・サイモン（2005年度COE調査研究協力者）が翻訳し、また紙面の都合から編集部で手を加えたものである。

REPORT 5 訪問・派遣研究員によるレポート

心はウチナンチュ

グラウジョール・カルロス（サンパウロ大学大学院　日本語・日本文学・日本文化修士課程） GLAUJOR Carlos

私は今年からサンパウロ大学の修士課程に入り、ブラジルで創作エイサー（琉球國祭り太鼓）の活動をしている沖縄系の人々の帰属意識について研究している。

神奈川大学COEプログラムのお陰で、私はJICA横浜移民資料館や、成城大学、武蔵大学、慶應義塾大学などの機関に調査研究に赴き、各機関の研究者や先生方に私の研究分野に対する知見を伺うことができた。

神奈川大学図書館で見つけた沖縄の文化・民族性・独自性などに関する資料と、諸先生方の手助けのお陰で、今回、随分と研究を進展させることができたと思う。

東京と横浜では、それぞれの支部の創作エイサーの活動に参加し、ただの見学者としてではなく一緒になってエイサーを楽しんだ。

10月7日には、琉球國祭り太鼓東京支部が出演する「四谷大好き祭り」を見に四谷へ行き、そこでは支部の団員の方々と交流することができた。

横浜では、ブラジル支部の団員であるということで、神奈川支部のリーダーから入門クラスへの仲間入りを許され、その練習に参加したのみならず、10月14日の戸塚スポーツフェスティバルでの演技にも出演させてもらった。（写真はその時の様子）

日本支部の活動の様子や舞台裏を見たことで、ブラジル支部との違いや共通点などを実感することができた。

ウチナンチュの経済的、文化的な輪が世界中に広がっていく中で創作エイサーが果たしている役割を深く理解するために、今後はその理論と実践を統合していきたいと思っている。

（GLAUJOR Carlos氏は2007年10月1日〜10月17日まで訪問研究員として来日された。）

＊ウチナンチュとは沖縄の言葉で「沖縄人」の意味。

＊本稿は英語で提出されたものを藤本真由海（COE支援事務室）が翻訳し、また紙面の都合から編集部で手を加えたものである。

REPORT 6 訪問・派遣研究員によるレポート

龍動と地震

蒋　明智（中山大学中国非物質文化遺産研究センター副教授） JIANG Mingzhi

日本は地震が多発する国である。その原因について、科学的な解釈では、日本列島は太平洋プレートとユーラシアプレートの境界部に位置し、その互いの運動と衝突によって地震が起こるという。だが、科学が発達していなかった昔は、人々は神の力を地震の理由としていた。日本の伝統的な観念に、地震の発生が「龍動」と関連していたという説もある。「龍動」、「龍王動」または「龍神動」が、地震を起こすと考える人もいた。そのほか、「火神動」、「水神動」、「天王動」、「金翅鳥*動」なども地震を起こす理由とされていた。武者金吉編の『増訂大日本地震史料』（1941〜43　文部省震災予防評議会）によれば、1006年2月から1443年6月の間に、京都では21回の地震が起こり、1460年2月から1482年10月の間に奈良では10回の地震が起こり、これらの地震はすべて龍神動と関連があると考えられていた。

地震を伴う火山の噴火と龍動との関連も考えられていた。1240年、1286年、1333年に、肥後国阿蘇山で起こった火山の噴火では、多くの人は龍が雲に乗って天に昇っていくのを目撃したという。これらの出来事についての記述は、肥後人吉の『八代日記』などに見られる。

龍動が地震を起こすと思われる理由は、伝説によれば、龍が湖や海、または沼や河川に棲むほか、地面の下にある龍穴も龍の棲む場所とされているからであろう。例えば興福寺の南大門東南の崖下や南山、葛城山、熊野三山、彦山、比叡山などにある龍穴は、日本でも有名な龍穴である。これらの龍穴を互いに繋ぎ、地下を縦横に走る穴道が形成された。例えば弁才天穴道、走湯山の八穴道、熱海社の九穴道などである。これらの穴道が湖や海に繋がっていたので、地震の発生と大きな関係があると思われたようである。

『大日本國地震之圖』では、日本の国土が龍に囲まれて楕円形になっており、龍の頭、目、角、鬚、鱗、背鰭が描かれている（図1）。中でも、12の背鰭が12の月にそれぞれ対応しているという。2、7、9月が龍神動とされ、1、5、8、10、11、12月が火神動、4、6月は金神動、3月が天王動とされる。こうして、龍神動が日本の国土・暦・地震と関連付けられた。これは『日本書紀』に見られる龍神が神器を以て「大八洲」、すなわち現在の日本列島を作った伝説にも対応しているのではないかと思われる。

図1

大日本國地震之圖（黒田日出男　2003：口絵）

注目すべきなのは、中国の漢代の科学者である張衡が紀元132年に作った地動儀にも八匹の龍が飾られていることである。龍の頭はそれぞれ八つの方角を向き、それぞれの口に銅の玉を銜え、玉が龍の口から吐き出され下にある蟇の口に落ちると、その龍の頭が向く方角に地震が起こったことを示す仕組みである（図2）。ここで見られるように、龍と地震との関連は古くから考えられており、さらなる研究が必要であると思われる。

（蒋明智氏は2007年10月1日〜10月14日まで訪問研究員として来日された。）

図2

張衡が発明した地動儀

参考文献

黒田日出男　2003『龍の棲む日本』（岩波新書）、岩波書店

＊金翅鳥は迦楼羅神の別名である。
（黒田日出男　2003：114）

＊本稿は中国語で提出されたものを彭偉文（RA）が翻訳し、また紙面の都合から編集部で手を加えたものである。

COEメンバーリスト

2003年度から今まで、神奈川大学21世紀COEプログラムに参加し、支えてくださった方々のリストです。

※すべて年度で記載

事業推進担当者・共同研究員・COE教員

名　前	年　度	備　考
池上　和夫	07年	COE拠点形成委員会委員長
福田　アジオ	03年～07年	拠点リーダー
橘川　俊忠	03年～07年	サブリーダー（06年～07年） 前事務局長（03年～05年）
西　　和夫	03年～07年	サブリーダー（07年）
大里　浩秋	03年～07年	研究遂行責任者（06年～07年）
香月　洋一郎	03年～07年	研究遂行責任者
佐野　賢治	03年～07年	研究遂行責任者
田上　繁	03年～07年	事務局長（06年～07年）
（以下50音順）		
青木　俊也	04年～07年	
芦澤　玖美	03年～05年	
宇佐見　義之	03年～05年	
梅野　光興	03年	
榎　　美香	06年～07年	
落合　一泰	03年～05年	
夏　　宇継	04年～07年	
金子　隆一	03年～07年	
刈田　均	06年～07年	
川田　順造	03年～07年	前サブリーダー（03年～05年）
河野　眞知郎	06年	調査研究協力者　05年
菊池　勇夫	03年～07年	
北原　糸子	03年～07年	
木下　宏揚	03年～07年	
君　　康道	03年～07年	
金　　貞我	03年～07年	
楠本　彩乃	04年	
河野　通明	03年～07年	
小馬　徹	03年～06年	
齊藤　隆弘	03年～07年	

名　前	年　度	備　考
佐々木　長生	06年～07年	
佐々木　睦	03年～07年	
鈴木　廣之	05年	
鈴木　陽一	03年～07年	前研究遂行責任者（03年～05年）
須山　聡	03年、05年	
孫　　安石	03年～07年	
田口　洋美	04年	調査研究協力者　07年
田島　佳也	03年～07年	
鄭　　美愛	07年	
津田　良樹	06年～07年	調査研究協力者　05年
冨井　正憲	03年～07年	
中島　三千男	03年～06年	前COE拠点形成委員会委員長
長瀬　一男	03年～07年	調査研究協力者　04年
中村　ひろ子	04年～07年	
中村　政則	03年～07年	前サブリーダー（03年～06年）
能登　正人	04年～07年	
八久保　厚志	03年～07年	
浜田　弘明	04年～07年	
原信田　實	03年	調査研究協力者　05年
平井　誠	06年～07年	
廣田　律子	03年～07年	
彭　　国躍	04年	
ボチャラリ・ジョン	03年～07年	
前田　禎彦	05年～07年	
増野　恵子	04年	
的場　昭弘	03年～07年	調査研究協力者　05年
丸山　宏	03年～05年	
三鬼　清一郎	03年～07年	
山口　建治	03年～07年	

COE研究員（PD・RA）・調査研究協力者・日本学術振興会特別研究員（50音順）

名　前	年　度	備　考
網野　暁	03年～04年	PD
李　　善愛	04年、07年	調査研究協力者
泉　　雅博	06年	調査研究協力者

名　前	年　度	備　考
井谷　善恵	06年	調査研究協力者
林　　淑姫	05年	調査研究協力者
上田　純広	07年	調査研究協力者

名　前	年　度	備　考
王　　京	07年	PD（RA　05年～06年）
大坪　潤子	04年	RA
大西　万知子	03年～04年	RA
岡本　浩一	05年～07年	調査研究協力者
小野地　健	07年	PD
海賀　孝明	04年～07年	調査研究協力者
樫村　賢二	05年～06年	PD（RA 04年）
貴志　俊彦	05年	調査研究協力者
木下　慶子	05年	調査研究協力者
金　　泰順	05年	調査研究協力者
金　　鋒	04年	調査研究協力者
國弘　暁子	06年～07年	PD
クリスティ・アラン	05年～06年	調査研究協力者
厳　　明	07年	調査研究協力者
髙坂　嘉孝	07年	調査研究協力者
コールマン・ティモシー	04年～06年	調査研究協力者
小林　光一郎	05年	RA
小松　大介	05年、07年	調査研究協力者
蔡　　文高	07年	調査研究協力者
佐々木　弘美	07年	RA
尚　　峰	06年	調査研究協力者
ジョン・サイモン	04年～05年	調査研究協力者
鈴木　彰	05年～07年	調査研究協力者
関根　祥人	05年	調査研究協力者
高野　宏康	03年～05年	日本学術振興会特別研究員
鄭　　淳英	07年	調査研究協力者
土田　拓	05年～07年	RA

名　前	年　度	備　考
富澤　達三	03年～04年	PD （調査研究協力者　05年～07年）
中井　真木	05年～06年	調査研究協力者
中野　泰	06年～07年	調査研究協力者
中町　泰子	03年～04年	RA（調査研究協力者　05年）
西田　幸夫	07年	調査研究協力者
新国　勇	07年	調査研究協力者
韓　　東洙	06年～07年	調査研究協力者
平山　康典	06年	調査研究協力者
ヒル・ラクエル	04年	調査研究協力者
藤永　豪	03年～05年	PD（調査研究協力者　05年）
彭　　偉文	04年～07年	RA
堀内　寛晃	06年～07年	調査研究協力者
本田　佳奈	06年	PD
マクレリー・ルシ・サウス	06年	調査研究協力者
丸山　泰明	05年～06年	PD
宮本　大輔	05年	RA （日本学術振興会特別研究員　06～07年）
ムンシ・ロジェ・ヴァンジラ	05年	調査研究協力者
諸井　孝文	06年	調査研究協力者
山本　志乃	06年～07年	調査研究協力者
尹　　賢鎮	06年～07年	調査研究協力者
劉　　渴氷	06年～07年	RA
林　　海涛	04年	調査研究協力者
リンゼイ・ウィリアム	04年～05年	調査研究協力者
ルシーニュ・フレデリック	03年、06年	RA （調査研究協力者　05年、07年）

COE支援事務スタッフ（順不同）

名　前	年　度
古閑　安明	03年～07年
寺島　剛真	03年～07年
長谷川　千穂	03年～07年
吉野　進	06年
関　ひかる	03年～07年

名　前	年　度
千秋　順子	03年～06年
坂野　純子	03年～06年
神原　朋之	05年～07年
小野　桂子	06年
小島　ちえみ	06年～07年

名　前	年　度
須永　明美	06年～07年
藤本　真由海	06年～07年
関屋　彩子	07年
七澤　裕美子	07年
佐藤　留実子	07年

＊調査研究協力者については、その年度通年ではなく短期間が原則であり、年度が変わる毎に更新している。
＊COE研究員・PD（Post Doctoral Fellow）は「PD」、COE研究員・RA（Research Assistant）は「RA」と表記する。

COE刊行物リスト

2003年度から本年度までに、神奈川大学21世紀COEプログラムが発行した刊行物のリストです。

2003年度

1. 年報　人類文化研究のための非文字資料の体系化　第1号　2004年3月31日発行

2004年度

2. 年報　人類文化研究のための非文字資料の体系化　第2号　2004年12月27日発行
3. 神奈川大学21世紀COEプログラム　調査研究資料1
   環境と景観の資料化と体系化にむけて　2004年12月27日発行
4. 神奈川大学21世紀COEプログラム　調査研究資料2　図像文献書誌情報目録　2005年3月25日発行

2005年度

5. 神奈川大学21世紀COEプログラム　調査研究資料3　図像研究文献目録　2005年9月25日発行
6. 年報　人類文化研究のための非文字資料の体系化　第3号　2006年3月31日発行
7. 神奈川大学21世紀COEプログラム　シンポジウム報告1　2006年3月31日発行
   第1回国際シンポジウム　プレシンポジウム　版画と写真—19世紀後半　出来事とイメージの創出—

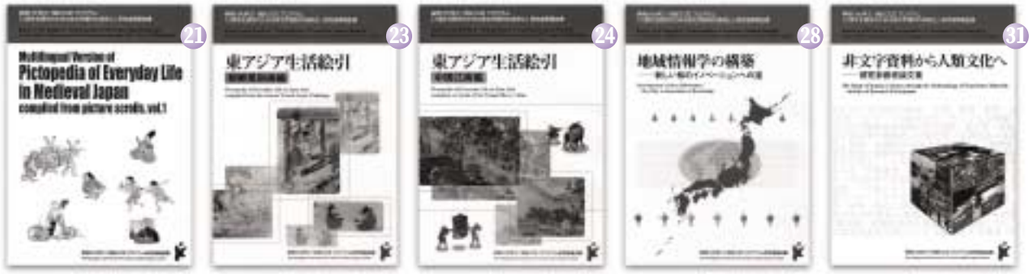
2006年度

8. 神奈川大学21世紀COEプログラム　シンポジウム報告2
   第1回国際シンポジウム　非文字資料とはなにか～人類文化の記憶と記録～　2006年6月30日発行
9. 神奈川大学21世紀COEプログラム　シンポジウム報告3　2006年6月30日発行
   第1班「図像資料の体系化と情報発信」公開研究会　図像から読み解く東アジアの生活文化
10. 立命館大学・神奈川大学21世紀COEプログラム　ジョイント・ワークショップ
    報告書　歴史災害と都市—京都・東京を中心に—　2007年2月15日発行

11. 神奈川大学21世紀COEプログラム　調査研究資料4
    手段としての写真—「澁澤写真」の追跡調査を中心に—　2007年3月20日発行
12. 神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究成果報告書
    マルチ言語版　絵巻物による日本常民生活絵引　第2巻（本文編）　2007年3月26日発行
    Multilingual Version of Pictopedia of Everyday Life in Medieval Japan compiled from picture scrolls, vol.2
13. 神奈川大学21世紀COEプログラム　シンポジウム報告4　2007年3月31日発行
    第2回国際シンポジウム　図像・民具・景観　非文字資料から人類文化を読み解く
14. 年報　人類文化研究のための非文字資料の体系化　第4号　2007年3月31日発行

2007年度

15. 神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究成果報告書
    マルチ言語版　絵巻物による日本常民生活絵引　第2巻（語彙編）　2007年6月26日発行
    Multilingual Version of Pictopedia of Everyday Life in Medieval Japan compiled from picture scrolls, vol.2 Multilingual Glossary
16. 神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究成果報告書
    「景観」と「環境」についての覚書　2007年12月20日発行
17. 神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究成果報告書
    環境に刻印された人間活動および災害の痕跡解読　2007年12月20日発行
18. 神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究成果報告書
    日本近世生活絵引　東海道編　2007年12月20日発行
19. 神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究成果報告書
    日本近世生活絵引　北海道編　2007年12月20日発行
20. 神奈川大学21世紀COEプログラム　調査研究資料5
    「澁澤写真」に見る1935～1936年の喜界島　2008年2月20日発行



㉑ 神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究成果報告書
マルチ言語版　絵巻物による日本常民生活絵引　第1巻（本文編） 2008年2月20日発行
Multilingual Version of Pictopedia of Everyday Life in Medieval Japan compiled from picture scrolls, vol.1

㉒ 神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究成果報告書
マルチ言語版　絵巻物による日本常民生活絵引　第1巻（語彙編） 2008年2月20日発行
Multilingual Version of Pictopedia of Everyday Life in Medieval Japan compiled from picture scrolls, vol.1 Multilingual Glossary

㉓ 神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究成果報告書
東アジア生活絵引　朝鮮風俗画編 2008年2月20日発行

㉔ 神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究成果報告書
東アジア生活絵引　中国江南編 2008年2月20日発行

㉕ 神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究成果報告書
高度専門職としての学芸員養成―大学院における養成プログラム検討結果報告―
2008年3月10日発行

㉖ 神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究成果報告書
身体技法・感性・民具の資料化と体系化 2008年3月10日発行

㉗ 神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究成果報告書
日本近世生活絵引　北陸編 2008年3月10日発行

㉘ 神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究成果報告書
地域情報学の構築―新しい知のイノベーションへの道― 2008年3月10日発行

㉙ 神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究成果報告書
非文字資料研究の理論的諸問題 2008年3月10日発行

㉚ 神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究成果報告書
非文字資料研究の可能性―若手研究者研究成果論文集― 2008年3月20日発行

㉛ 神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究成果報告書
非文字資料から人類文化へ―研究参画者論文集― 2008年3月20日発行

㉜ 神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究成果報告書
実験展示「あるく―身体の記憶―」をつくる 2008年3月20日発行

㉝ 神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究成果報告書
研究成果報告書総括編 2008年3月末発行予定

- **人類文化研究のための非文字資料の体系化（概要）** 2004年8月発行
- **人類文化研究のための非文字資料の体系化（概要）** 2007年4月発行

海外提携研究機関派遣研究員

2004年度から今まで、神奈川大学21世紀COEプログラムから海外提携研究機関に派遣された方々のリストです。

2004年度

氏　　名：藤永　豪　　派遣先提携研究機関名：北京師範大学民俗学与文化人類学研究所
派遣期間：2004年11月19日～12月1日
研究課題：北京市における景観変化についての調査研究

2005年度

氏　　名：王　京　　派遣先提携研究機関名：北京師範大学民俗学与文化人類学研究所
派遣期間：2005年7月6日～7月19日
研究課題：1930～1940年代の日本民俗学と中国

氏　　名：彭　偉文　　派遣先提携研究機関名：華東師範大学中国民俗保護開発研究センター
派遣期間：2005年9月17日～9月30日
研究課題：上海およびその周辺におけるさまざまな霊獣舞の研究

氏　　名：宮本　大輔　　派遣先提携研究機関名：浙江大学日本文化研究所
派遣期間：2005年11月1日～11月14日
研究課題：浙江省におけるショー族の言語使用状況

氏　　名：樫村　賢二　　派遣先提携研究機関名：延世大学校中央博物館
派遣期間：2005年12月1日～12月14日
研究課題：オートバイ宅配便からみる韓国社会について

氏　　名：大西　万知子　　派遣先提携研究機関名：サンパウロ大学日本文化研究所
派遣期間：2005年12月2日～12月18日
研究課題：アジア・ヨーロッパ・ラテンアメリカの情報発信（展示）の発達比較

2006年度

氏　　名：王　京　　派遣先提携研究機関名：華東師範大学中国民俗保護開発研究センター
派遣期間：2006年7月2日～7月15日
研究課題：戦前期の上海と民俗学

氏　　名：本田　佳奈　　派遣先提携研究機関名：ブリティッシュ・コロンビア大学アジア学科
派遣期間：2006年10月1日～10月15日
研究課題：ブリティッシュ・コロンビアにおける日系移民家庭への聞き取り調査と資料収集

氏　　名：國弘　暁子　　派遣先提携研究機関名：サンパウロ大学日本文化研究所
派遣期間：2006年10月30日～11月15日
研究課題：ブラジルのトラベスチに関する人類学的調査研究

氏　　名：彭　偉文　　派遣先提携研究機関名：中山大学中国非物質文化遺産研究センター
派遣期間：2006年11月1日～11月14日
研究課題：日本の獅子舞を中心に東アジアにおける霊獣の舞研究

2007年度

氏　　名：坂井　美香　　派遣先提携研究機関名：華東師範大学中国民俗保護開発研究センター
派遣期間：2007年8月13日～8月26日
研究課題：電気映像を用いない情報伝達の方法と効用について

氏　　名：國弘　暁子　　派遣先提携研究機関名：ブリティッシュ・コロンビア大学アジア学科
派遣期間：2007年10月1日～年10月15日
研究課題：インド、グジャラート州からカナダへの人の移動と、移住者の生活空間に関する調査研究

氏　　名：王　京　　派遣先提携研究機関名：中山大学中国非物質文化遺産研究センター
派遣期間：2007年11月5日～11月18日
研究課題：戦前広州における民俗学運動

海外提携研究機関訪問研究員

2004年度から今まで、海外提携研究機関から神奈川大学21世紀COEプログラムに招聘された方々のリストです。

2004年度

氏　　名：江　静　　所属研究機関等：浙江大学日本文化研究所専任講師／浙江大学人文学院中国古代史専攻院生
受入期間：2004年11月29日～12月12日
研究課題：元との交易による日本への輸入品の実態とその影響の調査研究

氏　　名：韓　同春
所属研究機関等：北京師範大学民俗学与文化人類学研究所／北京師範大学大学院民俗学専攻院生
受入期間：2004年12月1日～12月14日　　研究課題：日本の主要都市郊外における文化的特徴及び商業民俗の調査

氏　　名：尹　賢鎭
所属研究機関等：延世大学校中央博物館学芸員／高麗大学校ビジュアルカルチャー専攻院生
受入期間：2004年12月6日～12月19日　　研究課題：1900年以降のカルチャーイメージ戦略についての調査

氏　　名：毛　巧暉
所属研究機関等：華東師範大学中国民俗保護開発研究センター／華東師範大学民俗学専攻院生
受入期間：2004年12月12日～12月25日　　研究課題：日本民俗学における調査の理論と方法の研究

氏　　名：CHAMAS Fernando Calros
所属研究機関等：サンパウロ大学日本文化研究所／サンパウロ大学日本文化専攻院生
受入期間：2005年1月28日～2月11日　　研究課題：平安時代の日本文化、日本美術、仏像についての調査研究

2005年度

氏　　名：岳　永逸
所属研究機関等：北京師範大学文学院民俗学与文化人類学研究所教員
受入期間：2005年7月15日～7月28日　　研究課題：都市民俗学、民間信仰

氏　　名：尹　笑非
所属研究機関等：華東師範大学中国民俗保護開発研究センター／華東師範大学民俗学専攻院生
受入期間：2005年9月17日～9月30日　　研究課題：東アジアで増大し変化する中国人一般生活の吉兆研究

氏　　名：王　欣
所属研究機関等：浙江大学客員研究員／浙江工商大学教員（助手）
受入期間：2005年11月8日～11月21日　　研究課題：教科書における中国関係の挿絵の調査研究

氏　　名：KAUPATEZ Diogo
所属研究機関等：サンパウロ大学日本文化研究所／サンパウロ大学日本文化専攻院生
受入期間：2005年11月13日～11月29日　　研究課題：江戸時代の浮世絵、葛飾北斎についての研究

氏　　名：陳　穎恩
所属研究機関等：香港大学日本文化研究学系／現代日本経済史専攻院生
受入期間：2005年12月5日～12月18日　　研究課題：日本の都市計画、経済環境、市民生活

氏　　名：宋　俊華
所属研究機関等：中山大学中国非物質文化遺産研究センター助教授
受入期間：2006年2月22日～3月7日　　研究課題：日本の無形文化遺産研究のための非文字資料体系化調査

2006年度

氏　　名：戴　嵐
所属研究機関等：華東師範大学中国民俗保護開発研究センター／華東師範大学民俗学専攻博士生
受入期間：2006年7月6日～7月19日　　研究課題：日本の童話に登場する少女の挿絵

氏　　名：曹　栄
所属研究機関等：北京師範大学文学院民俗学与文化人類学研究所博士生
受入期間：2006年9月2日～9月15日　　研究課題：鎖国政策下の日本天主教或いは基督教信仰

氏　　名：王　志恒
所属研究機関等：香港大学日本ドラマ専攻修士生・RA研究員
受入期間：2006年10月7日～10月20日　　研究課題：日本のTVドラマの制作と視聴者動向

氏　　名：劉　曉春　　所属研究機関等：中山大学中国非物質文化遺産研究センター助教授
受入期間：2006年10月2日～10月15日
研究課題：人類文化研究非文字資料体系化及び民俗学相関研究・資料調査学術研究

氏　　名：吳　毓華
所属研究機関等：浙江工商大学日本語言文化学院教員（助手）
受入期間：2006年10月1日～10月14日　　研究課題：『清末民初報刊図画集成』における日本像

氏　　名：唐沢　ダニエラ　　所属研究機関等：サンパウロ大学大学院日本語・日本文学・日本文化修士課程
受入期間：2006年12月2日～12月18日
研究課題：ブラジルにおける日本マンガのローカル化プロセスに関する研究

氏　　名：BENESCH Oleg　　所属研究機関等：ブリティッシュ・コロンビア大学アジア研究専攻博士課程
受入期間：2006年11月21日～12月4日
研究課題：1895年～1945年においての武士道精神の発達について

2007年度

氏　　名：西村　真志葉　　所属研究機関等：北京師範大学文学院ポストドクター
受入期間：2007年7月25日～8月7日
研究課題：公私研究機関における非文字文化再構成の実践についての調査研究

氏　　名：衣　曉龍
所属研究機関等：華東師範大学中国民俗保護開発研究センター博士生
受入期間：2007年7月26日～8月8日　　研究課題：浮世絵の中の日本らしさ

氏　　名：蒋　明智
所属研究機関等：中山大学中国非物質文化遺産研究センター副教授
受入期間：2007年10月1日～10月14日　　研究課題：中日龍母伝説と信仰の比較研究

氏　　名：GLAUJOR Carlos
所属研究機関等：サンパウロ大学大学院日本語・日本文学・日本文化専攻修士課程
受入期間：2007年10月1日～10月17日　　研究課題：民族性―沖縄からブラジルに渡った人と文化―

氏　　名：許　海華
所属研究機関等：浙江工商大学日本語言文化学院教員
受入期間：2007年10月10日～10月23日　　研究課題：画像資料に見られる明代中国人の日本認識

氏　　名：PETRUCCI Maria Grazia　　所属研究機関等：ブリティッシュ・コロンビア大学博士課程
受入期間：2007年10月28日～11月11日
研究課題：日本の海賊とポルトガル商人の宗教的・経済的関係について

若手研究者業績

2003年から今までの5年間、神奈川大学21世紀COEプログラムで活躍されました若手研究者（PD・RA）の方々の業績をCOE関連およびCOEに関わる研究組織関連のものを中心に紹介いたします。
なお、以下の名称については下記のように略記いたしました。

*1　神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究成果報告書　→　COE成果報告書
*2　第3回神奈川大学COE国際シンポジウム・プレシンポジウム　若手研究者ワークシップ　→　COE若手研究者ワークショップ

網野　暁（PD）

論　文
- 《研究ノート》「非文字資料研究についての一考察」『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化／第1号』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、195-201、2004年3月
- 《研究ノート》「非文字の資料と資料化」『年報　人類文化研究のための非文字資料の体系化／第2号』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、204-211、2004年12月

その他
- 《コラム》「韓国ソウルをたずねて…」『非文字資料研究／No.2』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、30、2003年12月

王　京（PD）

著　書
- 『1930、40年代の日本民俗学と日本』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2008年2月
- COE成果報告書*1『東アジア生活絵引／中国江南編』（共著）、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2008年2月
- 『小川島の民俗―群馬県利根郡月夜野町下津小川島』（共著）、神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科、55-63、82-91、155-170を執筆、2004年3月

論　文
- 《研究ノート》「教会大学と日中戦争―『北平私立輔仁大学檔案』（1925～1952年）から見た戦時下の学生収容―」『年報　人類文化研究のための非文字資料の体系化／第3号』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、250-259、2006年3月
- 《研究ノート》「戦時下の中国民俗研究―永尾龍造の研究と『支那民俗誌』編纂刊行の背景―」『年報　人類文化研究のための非文字資料の体系化／第4号』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、171-192、2007年3月
- 「『関東大震災・地図と写真のデータベース』の作業手順」COE成果報告書*1『環境に刻印された人間活動および災害の痕跡解読』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、121-126、2007年12月
- 「関東大震災と航空写真」COE成果報告書*1『環境に刻印された人間活動および災害の痕跡解読』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、147-179、2007年12月

発　表
- 「北京師範大学所蔵『北平私立輔仁大学檔案』（1925～1952年）」神奈川大学21世紀COEプログラム若手研究者海外派遣報告会、2006年3月
- 「中国旅行社と『旅行雑誌』」神奈川大学21世紀COEプログラム若手研究者海外派遣報告会、2007年1月
- 「関東大震災と航空写真」神奈川大学21世紀COEプログラム第3回全体研究会、2007年9月

その他
- 《翻訳》「熊月之『日本が上海に租界をつくろうとした件の資料』」『中国における日本租界―重慶・漢口・杭州・上海』お茶の水書房、2006年4月
- 《コラム》「中国・国家主導の博物館事業」『非文字資料研究／No.6』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、22-23、2004年12月
- 《コラム》「『民俗学誌』（Folklore Studies）について」『非文字資料研究／No.11』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、30、2006年3月
- 「『旅行雑誌（China Traveler)』について」『非文字資料研究／No.18』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、18-19、2007年12月
- 「日中民俗学交流のひとこま―何思敬とThe Handbook of Folkloreの中国導入―」『非文字資料研究／No.19』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、6-7、2008年3月

- 「COE若手研究者ワークショップ*2『手段としての「非文字」―資料と方法のあいだ―』を終えて」『非文字資料研究／No.19』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、34-35、2008年3月

大坪　潤子（RA）

論　文
- 《研究ノート》「銅像の建つ場についての考察」『年報　人類文化研究のための非文字資料の体系化／第2号』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、187-194、2004年12月
- 《研究ノート》「騎馬像の居場所」COE成果報告書*1『非文字資料研究の可能性―若手研究者研究成果論文集―』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、265-272、2008年3月

その他
- 《調査報告》「旧南洋群島の神社跡地調査報告」『年報　人類文化研究のための非文字資料の体系化／第2号』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、239-322、2004年12月
- 《書評》「富澤達三『錦絵のちから　幕末の時事的錦絵とかわら版』」『歴史民俗資料学研究／第10号』神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科、105-110、2005年3月
- 《フィールドノート》「南洋群島に神社をたずねて」『非文字資料研究／No.6』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、20-21、2004年12月

大西　万知子（RA）

論　文
- 《研究ノート》「博物館におけるモノとヒトとのかかわりについての一考察―広島平和記念資料館の事例から―」『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化／第1号』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、212-220、2004年3月
- 《研究ノート》「広島における記憶と身体のかかわりについての一考察」『年報　人類文化研究のための非文字資料の体系化／第2号』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、195-203、2004年12月
- 「人類の記憶、ヒロシマ」COE成果報告書*1『非文字資料研究の可能性―若手研究者研究成果論文集―』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、3-51、2008年3月

発　表
- 「サンパウロ大学海外派遣研究・ブラジル、サンパウロにおける広島原子爆弾投下の展示について」神奈川大学21世紀COEプログラム若手研究者海外派遣報告会、2006年3月
- 「視覚に障害を持つ人に配慮された触れる展示の役割について」神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科研究会、2006年6月
- 「視覚に障害を持つ人に配慮された展示解説の役割について」神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科研究会、2007年11月
- 「感性を展示すること―英国と日本の事例から」COE若手研究者ワークショップ*2、2008年1月

その他
- 《研究レポート》「第76回神奈川大学日本常民文化研究所研究会『常民文化研究の資料と方法―人類学の立場から―』川田順造先生の講義レポート」『常民研news／21号』神奈川大学日本常民文化研究所、2003年9月
- 《コラム》「アジア・ヨーロッパ・ラテンアメリカの情報発信（展示）の発達比較―日本から一番遠い国、ブラジルでは―」『非文字資料研究／No.13』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、17、2006年9月
- 「国際シンポジウム参加報告・第2回国際シンポジウムを終えて」『非文字資料研究／No.14』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、13、2006年12月
- 「威厳と挑戦―大英博物館の非文字資料から広がる風景―」『非文字資料研究／No.4』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、20-21、2004年6月

小野地　健（PD）

論　文
- 「八百比丘尼伝承の死生観」『人文研究／155号』神奈川大学人文学会、51-72、2005年3月
- 「『日招き伝承』考」『人文研究／158号』神奈川大学人文学会、99-125、2006年3月
- 「虹と市―境界と交換のシンボリズム」『人文研究／160号』神奈川大学人文学会、29-76、2007年3月
- 「クシャミと人類文化―身体音からの人類文化研究の体系化のための試論」COE成果報告書*1『非文字資料研究の可能性―若手研究者研究成果論文集―』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、89-107、2008年3月

発　表
- 「クシャミと人類文化」神奈川大学21世紀COEプログラム第4回全体研究会、2007年11月

その他
- 《コラム》「『虹』と『市』」『非文字資料研究／No.16』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、26、2007年6月

樫村　賢二（PD）

著　書
- 神奈川大学21世紀COEプログラム調査研究資料3『図像研究文献目録』採録・編集を担当、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2005年9月

論　文
- 《研究ノート》「ユニバーシティ・ミュージアムと学芸員養成課程」『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化／第4号』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、125-170、2007年3月
- 「オートバイ宅配便（クイックサービス）にみる韓国社会」COE成果報告書*1『非文字資料研究の可能性―若手研究者研究成果論文集―』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、109-120、2008年3月

発　表
- 「調査写真の資料化―韓国のオートバイ宅配便調査を事例に」COE若手研究者ワークショップ*2、2008年1月

その他
- 《コラム》「周期祭の背景」『非文字資料研究／No.6』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、24、2004年12月
- 《フィールドノート》「韓国を少し知るヒント―自転車とオートバイ―」『非文字資料研究／No.11』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、16-17、2006年3月
- 《コラム》「鳥取県において民具調査を始めて」『非文字資料研究／No.17』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、22、2007年9月
- 「鳥取県における民具調査の取組み」『民具マンスリー／40-5』神奈川大学日本常民文化研究所、2007年8月

國弘　暁子（PD）

論　文
- 「『異装』が意味するもの―インド、グジャラート州におけるヒジュラの衣装と模倣に関する考察」COE成果報告書*1『非文字資料研究の可能性―若手研究者研究成果論文集―』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、153-164、2008年3月

発　表
- 「人類文化における性とジェンダーの捉え方にみる普遍性と特殊性―インド、ブラジル、日本の三角測量に向けての試論」比較民俗研究会、神奈川大学、2007年1月
- 「人類文化における『トランス・ジェンダー』の捉えかたと習俗の普遍性と特殊性―ブラジルのトラベスチに関する人類学的調査研究―」神奈川大学21世紀COEプログラム若手研究者海外派遣報告会、2007年1月
- 「ブリティッシュ・コロンビアにおける先住民と『ベルダーシュ』に関する調査報告」神奈川大学21世紀COEプログラム第4回全体研究会、2007年11月

その他
- 《コラム》「インドにおけるフィールドワークの実践」『非文字資料研究／No.13』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、30、2006年9月
- 《フィールドノート》「性とジェンダーをどうとらえるか―人類文化における普遍性と特殊性の一事例研究」『非文字資料研究／No.15』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、19-21、2007年3月
- 「ベルダーシュ」―異性装から「異装」研究へ―『非文字資料研究／No.19』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、5、2008年3月

小林　光一郎（RA）

論　文
- 「『踊る猫の話』伝承の背景―林恵太郎家の伝承をもとに―」『小川島の民俗』神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科、126-146、2004年

●「「二つの湖にまつわる土地観念―猪名湖と長湖にまつわる伝承の背景にある歴史―」『松原の民俗』神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科、221-238、2006年3月

●《研究ノート》「『踊り歌う猫の話』に歌が組み込まれた背景―『猫じゃ猫じゃ』の歌を事例に―」COE成果報告書*1『非文字資料研究の可能性―若手研究者研究成果論文集―』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、233-249、2008年3月

佐々木 弘美（RA）

論 文
●「『朝鮮軍陣図屏風』を読み解く」『歴史民俗資料学研究／第12号』神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科、185-214、2007年3月

●「熊野と律僧と市女笠―一遍聖絵を読む」COE成果報告書*1『非文字資料研究の可能性―若手研究者研究成果論文集―』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、73-88、2008年3月

発 表
●「絵画の構図をよむ―一遍聖絵の場合」COE若手研究者ワークショップ*2、2008年1月

土田 拓（RA）

論 文
●《フィールドノート》「離農家を継ぐ―北海道紋別市のカヨイサクとカヨイサク地への定住」『歴史民俗資料学研究／第10号』神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科、69-92、2005年3月

●《研究ノート》「住みつづける意志―紋別市内陸部における畜舎景観の成りたち―」『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化／第3号』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、271-284、2006年3月

●《研究ノート》「アルバムのなかの戦後開拓」COE成果報告書*1『非文字資料研究の可能性―若手研究者研究成果論文集―』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、251-264、2008年3月

発 表
●「調査写真の性格と用法―景観の中のコンクリートブロック」COE若手研究者ワークショップ*2、2008年1月

その他
●《コラム》「『開拓定住』を問う場としての北海道」『非文字資料研究／No.10』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、17、2005年12月

●「北海道の水稲直播き―雨竜郡幌加内町のタコアシをめぐって―」『民具マンスリー／第37巻9号』神奈川大学日本常民文化研究所、1-8、2004年12月

富澤 達三（PD）

論 文
●《研究ノート》「『黒船かわら版』の情報」『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化／第2号』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、143-152、2004年12月

●《研究ノート》「非文字資料のデジタル化と歴史研究 近世画像資料を例として」COE成果報告書*1『非文字資料研究の可能性―若手研究者研究成果論文集―』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、219-232、2008年3月

発 表
●「画像資料のデジタル化と歴史研究への活用」神奈川大学21世紀COEプログラム第2回全体研究会、2004年9月

その他
●《コラム》「東京都写真美術館を訪れて…」『非文字資料研究／No.2』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、30、2003年12月

●《コラム》自著を語る「錦絵のちから 幕末の時事的錦絵とかわら版」『非文字資料研究／No.5』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、26、2004年9月

●「博物館・美術館・大学図書館・暴力のあと」『非文字資料研究／No.7』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、22-23、2005年3月

●《研究エッセイ》「文久2年の『はしか絵』」『非文字資料研究／No.17』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、20-21、2007年9月

中町 泰子（RA）

論 文
●《研究ノート》「図像から考えるモノと技術―伏見の煎餅職人の道具と技術から―」『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化／第1号』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、221-228、2004年3月

●《研究ノート》「諸職風俗図像と『新撰百工図』」『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化／第2号』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、153-170、2004年12月

その他
●《コラム》「煎餅のつやと道具のつや」『非文字資料研究／No.3』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、26、2004年3月

●《翻刻》「意地喜多那誌」『歴史民俗資料学研究／第12号』神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科、1-35、2007年3月

藤永 豪（PD）

論 文
●《研究ノート》「写真資料をもとにした景観分析に関する若干の試論―佐賀平野における村落景観を事例に―」『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化／第1号』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、202-211、2004年3月

●《研究ノート》「中山間地域における住民の環境利用と生活空間の変化―写真にみる景観の変遷をとおして―」『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化／第2号』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、171-186、2004年12月

●《研究ノート》「北京市都心部および郊外農山村の景観変容」『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化／第3号』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、238-249、2006年3月

●「景観資料としての写真をめぐって」COE成果報告書*1『「景観」と「環境」についての覚書』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、43-53、2007年12月

発 表
●「景観分析における資料としての写真の可能性」神奈川大学COE第2回国際シンポジウム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」『図像・民具・景観 非文字資料から人類文化を読み解く』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2006年10月

その他
●神奈川大学21世紀COEプログラム調査研究資料2『図像文献書誌情報目録』（共編）、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2005年3月

●《コラム》「佐賀平野の干拓集落の景観を観察して」『非文字資料研究／No.3』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、25、2004年3月

●《コラム》「北京―改革開放が生み出す景観―」『非文字資料研究／No.7』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、24、2005年3月

●《フィールドノート》「むらの風景が語るもの―世界遺産白川郷を訪ねて―」『非文字資料研究／No.11』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、18-19、2006年3月

●「『澁澤写真』の現場を歩いて」神奈川大学21世紀COEプログラム調査研究資料4『手段としての写真―「澁澤写真」の追跡調査を中心に―』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、42-49、2007年3月

●「景観分析における資料としての写真の可能性」神奈川大学21世紀COEプログラム シンポジウム報告4 第2回国際シンポジウム『図像・民具・景観 非文字資料から人類文化を読み解く』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、114-119、2007年3月

●「大学生の環境認識―自然地理学の講義現場から―」『非文字資料研究／No.18』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、14-15、2005年3月

ルシーニュ・フレデリック（RA）

論 文
●《研究ノート》「フランスにおける柳田国男の紹介と評価」『歴史民俗資料学研究／第11号』神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科、243-249、2004年3月

●「フランス博物館の情報戦略」『非文字資料研究／No.3』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、22-23、2004年3月

その他
●《コラム》「野外民族博物館リトルワールドにおける『民族』概念についての初歩的レポート」『非文字資料研究／No.15』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、24-25、2007年3月

彭　偉文（RA）

著　書
- 《訳書》COE成果報告書*1『マルチ言語版「絵巻物による日本常民生活絵引」／第2巻（語彙編）』（共著）、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2007年6月
- COE成果報告書*1『東アジア生活絵引／中国江南編』（共著）、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2008年2月
- 《訳書》COE成果報告書*1『マルチ言語版「絵巻物による日本常民生活絵引」／第1巻（語彙編）』（共著）、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2008年2月

論　文
- 《研究ノート》「『姑蘇繁華図』に見る清代前期の江南地域における紡織業及びその流通―地方文献に照らして―」『年報　人類文化研究のための非文字資料の体系化／第3号』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、260-270、2006年3月
- 「『姑蘇繁華図』における女性の世界」COE成果報告書*1『非文字資料研究の可能性―若手研究者研究成果論文集―』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、53-72、2008年3月

発　表
- 「記録手段としての絵画―『姑蘇繁華図』に描かれた女性を例として」COE若手研究者ワークショップ*2、2008年1月

その他
- 《コラム》「獅子で付き合う、獅子で競う―広東の醒獅―」『非文字資料研究／No.6』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、25、2004年12月
- 《フィールドノート》「変化しつつある文化遺産―広東醒獅の現状について―」『非文字資料研究／No.15』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、22-23、2007年3月

本田　佳奈（PD）

論　文
- 《研究ノート》「西米良村の山で働く人々と狩りの記録」COE成果報告書*1『非文字資料研究の可能性―若手研究者研究成果論文集―』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、167-218、2008年3月

その他
- 《コラム》「手のひらが受け継ぐもの」『非文字資料研究／No.12』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、26、2006年6月
- 《調査報告》「日系カナダ人の持つ地名の記憶―バンクーバーにおける初歩的調査レポート―」『年報　人類文化研究のための非文字資料の体系化／第4号』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、291-294、2007年3月

丸山　泰明（PD）

論　文
- 「文化政策としての民俗博物館―国民国家日本の形成と『国立民俗博物館』構想」『年報　人類文化研究のための非文字資料の体系化／第3号』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、53-77、2006年3月
- 「文化遺産化する『景観』―観光旅行、博覧会、博物館の19−20世紀」COE成果報告書*1『非文字資料研究の可能性―若手研究者研究成果論文集―』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、121-135、2008年3月

発　表
- 「21世紀における博物館の可能性―北欧で考えた二、三のこと」COE若手研究者ワークショップ*2、2008年1月

その他
- 《コラム》「同時代を見る眼と博物館」『非文字資料研究／No.9』、26、2005年9月
- 「デンマークの野外博物館」『非文字資料研究／No.12』、22-23、2006年6月

宮本　大輔（RA）

論　文
- 「中国における危機言語問題―言語転用が招く言語の死―」『言語と文化論集／第11号』神奈川大学大学院外国語学研究科、113-131、2004年12月
- 「言語危機からみる中国の共通語政策」『人文研究／No.156』神奈川大学人文学会、137-161、2005年9月
- 「雲南省都市部における民族語使用状況―少数民族出身大学生の予備調査に基づいて―」『言語と文化論集／第12号』神奈川大学大学院外国語学研究科、149-166、2005年12月
- 《研究ノート》「中国における言語評価―浙江省の大学生を例にして―『年報　人類文化研究のための非文字資料の体系化／第4号』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、193-202、2007年3月
- 「日本人学生の言語評価―神奈川大学で行った予備調査に基づいて―」『言語と文化論集／第14号』神奈川大学大学院外国語学研究科、51-74、2008年2月
- 「北京における言語評価」COE成果報告書*1『非文字資料研究の可能性―若手研究者研究成果論文集―』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、137-151、2008年3月

発　表
- 「非文字と言語―北京大学生の言語イメージを通して」COE若手研究者ワークショップ*2、2008年1月

その他
- 《コラム》「Ethnologueから見る言語危機の拡大」『非文字資料研究／No.9』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、27、2005年9月

劉　渭氷（RA）

論　文
- 「中国語色彩語の象徴化」『人文研究／156号』神奈川大学人文学会、145-169、2005年9月
- 「『詩経』から見た色彩語」『言語と文化論集／第12号』神奈川大学大学院外国語学研究科、121-147、2005年12月

その他
- 《コラム》「色彩認識の象徴化―京劇の臉譜の表すもの―」『非文字資料研究／No.14』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、19、2006年12月

ホームページの更新について　http://www.himoji.jp/

2008年3月31日の本プログラムの終了に伴い、これまでのホームページを全面的に更新いたしました。更新後のホームページは2008年4月1日以降、本事業を継承する非文字資料研究センターの管理に移行します。

リニューアルしたホームページでは、この5年間の事業の経過および成果を明らかにして、わたくしどもが作り上げてきた成果についてのご意見をいただく窓口とするとともに、この成果をさらに発展させるべき方向などについても示唆を得たいと考えております。主に以下のような内容に力点を置いてリニューアルしました。

なお、ホームページのURLには変更はありません。

1. 神奈川大学21世紀COEプログラムの終了に伴い、2008年4月1日以降、日本常民文化研究所付置非文字資料研究センターが事業を継承すること。
2. 本プログラムにおいて掲げてきた「図像資料の体系化と情報発信」、「身体技法および感性の資料化と体系化」、「環境と景観の資料化と体系化」、「地域統合情報発信」、「実験展示」、「理論総括研究」の研究課題それぞれの活動経過と成果の概要をまとめ、課題をどこまでクリアできたのかを明確にしたこと。
3. 本プログラムに関わった方々の研究成果を一覧化して、どのような研究領域の人々がともに作り上げてきた事業なのかを明らかにし、またプログラムの５年間に参画者が挙げた成果を示したこと。
4. 本プログラムにおいて収集した研究資料のデータベース、あるいは今後データの持続的な蓄積・更新が必要なデータベースをともに公開し、広く社会的利用に供したこと。
5. 本プログラムの研究拠点として重要課題である若手研究者の育成をどのように行ってきたか、またその成果についての紹介を行ったこと。
6. 「人類文化研究のための非文字資料の体系化」の課題を遂行する上で研究連携を深めた海外の研究機関との交流の実態を紹介したこと。

拡大ホームページ委員会

2007年度　外部評価の実施

去る2月25日（月）、26日（火）の2日間にわたって2007年度の外部評価を実施しました。本年度は、常磐大学コミュニティ振興学部 水嶋英治教授、東京大学史料編纂所 保立道久教授、國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所所長 井上順孝教授の3名を外部評価委員に委嘱いたしました。1日目には水嶋英治教授、2日目には保立道久教授、井上順孝教授においでいただき、拠点リーダーをはじめCOE関係者が出席して、最終年度の事業進捗状況を報告しました。

各外部評価委員には具体的な問題点を指摘していただきましたが、その主な内容は以下の通りです。

1日目　水嶋 英治 教授

1. 収集した資料や研究成果の公開方法
2. 終了後の後継組織
3. 非文字資料研究の到達点と可能性
4. 非文字資料発信に際しての著作権問題
5. 高度専門職学芸員養成プログラムの提示

2日目　保立 道久 教授・井上 順孝 教授

1. 統合化・体系化へ向けての研究組織のあり方
2. 研究成果の最終的な発信方法
3. 非文字資料と文字資料との理論構築
4. 日本常民文化研究所の将来構想
5. 図像資料のデータベース化と著作権問題
6. 若手研究者育成の実績

上記の内容について質疑応答が行われましたが、その評価につきましては、後日、各委員から評価報告書が届けられることになっています。最終的な評価は、後継組織である日本常民文化研究所非文字資料研究センターの刊行物などで公開することになります。

今回の外部評価は、最終年度ということもあって、5年間の研究成果とその発信方法、非文字資料研究の可能性、拠点形成としての後継組織のあり方、非文字資料のネット上での発信と著作権問題などが中心的な課題となりました。研究成果については、全体的に高い評価をいただきましたが、非文字資料の統合化・体系化の問題、ネット上での発信方法、若手研究者育成の方策などの点で問題も指摘されました。

なお、質疑応答の中で、非文字資料研究の有効性と日本、中国、韓国などを中心とするアジアの国々と連携した非文字研究の推進、高度専門職学芸員養成に関する連携大学院構想、非文字資料の著作権問題に対する取り組みなど、今後の研究活動の指針ともなる貴重なご意見もいただきました。

非文字資料研究 News Letter バックナンバー総目次

INDEX

No.1　2003年10月31日発行

ご挨拶 …… 山火　正則（神奈川大学学長）

プロジェクトの目的および研究計画 …… 福田　アジオ

研究構想図

各班の目指すもの

第1班「図像資料の体系化と情報発信」 …… 福田　アジオ

第2班「身体技法および感性の資料化と体系化」 …… 川田　順造

第3班「環境と景観の資料化と体系化」 …… 香月　洋一郎

第4班「文化情報発信の新しい技術の開発」 …… 佐野　賢治

研究エッセイ

それは一枚の写真から始まった …… 中村　政則

中国調査　中間レポート …… 鈴木　陽一

災害展示の絵図とCG …… 北原　糸子

サハリン調査ノート …… 冨井　正憲

研究会報告

地震の痕跡と名所絵『名所江戸百景』の新しい読み方 …… 原信田　實

図像・動作情報のディジタル入力について …… 齊藤　隆弘

No.2　2003年12月31日発行

巻頭言 …… 網野　善彦（元神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科教授）

プロジェクトの構想および研究組織 …… 橋川　俊忠

研究組織図

COE関係諸規程集

21世紀COEプログラム拠点形成に関わる関係規程

1. 神奈川大学21世紀COE拠点形成委員会規程
2. 神奈川大学COEプログラム研究支援者に関する取扱規程
3. 神奈川大学COEプログラム研究協力者に関する取扱規程
4. 神奈川大学研究拠点形成費補助金取扱規程

参考：COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究推進会議内規

研究エッセイ

「鯡漁」図のあれこれ …… 田島　佳也

鬼神の面 …… 廣田　律子

景色（景観）が変わるということ …… 八久保　厚志

WWWのセキュリティ …… 木下　宏揚

研究会報告

人類学の立場からの問題提起 …… 川田　順造

民具という非文字資料から日本列島の古代多民族社会を復原する試み …… 河野　通明

■コラム …… 網野　暁（PD）・富澤　達三（PD）

No.3　2004年3月31日発行

巻頭言 …… 笠松　宏至（元神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科教授）

研究エッセイ

絵画史料と建物の復原 …… 西　和夫

紙の造形―いざなぎ流の御幣― …… 梅野　光興

伝統芸能とデジタル技術の出会い …… 長瀬　一男

「非文字資料」と歴史学 …… 的場　昭弘

「横浜写真」の位置 …… 金子　隆一

研究会報告

可能性の宝庫―「絵引」― …… 窪田　涼子

風景印にみる地域の提示 …… 須山　聡

■コラム　「ボロ織り」から見えたもの …… 加藤　友子

フィールド・ノート

奉安殿「発見」記 …… 藤田　庄市

海外博物館事情

フランス博物館の情報戦略 …… フレデリック・ルシーニュ

■コラム　佐賀平野の干拓集落の景観を観察して …… 藤永　豪

■コラム　煎餅のつやと道具のつや …… 中町　泰子

No.4　2004年6月30日発行

ご挨拶 …… 大野　泰（学校法人　神奈川大学理事長）

対　談

感性のモデル化―人類学の立場から― …… 尾本　恵市×川田　順造

研究エッセイ

2脚の椅子が跨ぐ空間と時間―ムテサ1世のトーネット#14― …… 小馬　徹

非文字資料としての日本語を考える―音訓、当て字、語源― …… 山口　建治

非文字資料としての景観 …… 八久保　厚志

中国図像学という迷宮 …… 佐々木　睦

海外博物館事情

威厳と挑戦―大英博物館の非文字資料から広がる風景― …… 大西　万知子

フィールド・ノート

中国雲南省麗江調査記―東巴文化の今昔―

1. 東巴経典と現代に伝わる原初的な紙製法 …… 田上　繁
2. 世界常民―雲南省で考える― …… 中村　政則
3. 麗江と大理の狭間で考えたこと …… 的場　昭弘
4. “観光”という情報発信 …… 佐野　賢治

No.5　2004年9月30日発行

巻頭言 …… 山口　徹（神奈川大学名誉教授）

対　談

歴史的事実とは何か
—文字資料と非文字資料のあいだ—
…… 宮地　正人×中村　政則

研究エッセイ

朝鮮時代の図像資料と風俗画—女性をめぐる眼差し—
…… 金　貞我

長くなった日本人の脚？ …… 芦澤　玖美

近代天皇のイメージ形成—視覚情報分析の可能性について—
…… 増野　恵子

上海史研究と『良友』画報について …… 孫　安石

モバイルエージェント間通信のトラフィック …… 能登　正人

海外博物館事情

韓国における大学博物館の現況と役割 …… 金　花子

■コラム・自著を語る
『錦絵のちから　幕末の時事的錦絵とかわら版』 …… 富澤　達三

No.6　2004年12月31日発行

巻頭言 …… 永田　一清（神奈川大学副学長）

対　談

図像資料から見た江戸のマチ
…… 竹内　誠×福田　アジオ

研究エッセイ

特集：博物館資料は語る

博物館資料は誰のもの …… 中村　ひろ子

トランス・アトランティック物語
—ヨーロッパ・コレクションのなかの古代メキシコ工芸— …… 落合　一泰

博物館空間に広がる景観的世界 …… 浜田　弘明

展示における昔を考える …… 青木　俊也

フィールド・ノート

ICOM2004年　ソウル世界博物館大会の参加報告 …… 金　貞我

南洋群島に神社をたずねて …… 大坪　潤子

海外博物館事情

中国・国家主導の博物館事業 …… 王　京

■コラム　周期祭の背景 …… 樫村　賢二

■コラム　獅子で付き合う、獅子で競う—広東の醒獅— …… 彭　偉文

INDEX

No.7　2005年3月31日発行

巻頭言 …… 桜井　邦朋（神奈川大学名誉教授）

対　談

『民具が語る列島の歴史』
…… 佐々木　長生×河野　通明

研究エッセイ

倭城・倭館・合戦図
—文献史料との関わりをめぐって— …… 三鬼　清一郎

『絵巻物による日本常民生活絵引』がこだわるもの
—あるいはマルチ言語版が伝えていかなければならないもの—
…… 君　康道

色彩意味論研究の社会言語学的アプローチ …… 彭　国躍

自然と人間、その関係の変移 …… 田口　洋美

フィールド・ノート

環境と民具—再び世界常民について— …… 中村 政則

海外博物館事情［アメリカ］

博物館・美術館・大学図書館・暴力のあと …… 富澤　達三

■コラム　北京—改革開放が生み出す景観— …… 藤永　豪

■コラム　大衆文化の視覚イメージにおける記憶の伝達 …… 尹　賢鎮

■コラム　中国民俗界の「東方明珠」 …… 毛　巧輝
—華東師範大学中国民俗保護開発研究センターの紹介—

No.8　2005年6月30日発行

巻頭言 …… 中島　三千男
（神奈川大学副学長・COE拠点形成委員会委員長）

対　談

土地の記憶—人と建物が織りなす景観—
…… 森　まゆみ×西　和夫

研究エッセイ

特集：文字と非文字の間

カモカモ（鴨々）について—コトからモノへの関心— …… 菊池　勇夫

杭州に関わる二つのテーマ …… 大里　浩秋

非文字資料としての加賀藩検地絵図を読み解く …… 田上　繁

道教の符呪—道教儀礼史における非文字資料研究の可能性をめぐって—
…… 丸山　宏

フィールド・ノート

納西族東巴教「求寿」儀式調査 …… 夏　宇継

■コラム　対抗と交流 …… 江　静

海外博物館事情［ロシア］

自由と想像—ロシアの博物館展示が教えるもの—
…… 穆恺黛絲（ムカイダイス）

研究会報告

歴史研究と図像資料のデジタル化 …… 孫　安石

No.9　2005年9月30日発行

巻頭言 …… 橘川　俊忠
（日本常民文化研究所所長・COE事務局長）

対　談

修験道と日本文化—その象徴する世界—
…… 宮家　準×佐野　賢治

研究エッセイ

Sex? Hapana,tume-chill
—「非文字」の混合言語、シェン語のVサイン— …… 小馬　徹

民俗芸能のデジタル化の取り組み …… 廣田　律子

平安時代の和歌と呪術 …… 繁田　信一

フィールド・ノート

古代地域史研究と出土史料—「加賀郡牓示札」の史料的性格—
…… 前田　禎彦

海外博物館事情［コンゴ］

コンゴ国立美術館研究所（IMNC） …… ムンシ・ロジェ・ヴァンジラ

研究会報告

祓い儀礼から見た呉越神歌の文化史的意義 …… 顧　希佳

■コラム　日本での十日間 …… フェルナンド・カルロス・シャマス

■コラム　町の商店街と商業民俗研究 …… 韓　同春

■コラム　同時代を見る眼と博物館 …… 丸山　泰明

■コラム　Ethnologueから見る言語危機の拡大 …… 宮本　大輔

No.10　2005年12月31日発行

巻頭言 …… 田上　繁
（歴史民俗資料学研究科委員長・COE事業推進担当者）

第1回COE国際シンポジウム
プレシンポジウム　開催レポート

●はじめに
国際シンポジウム「非文字資料とはなにか」
開催レポート

●プログラムスケジュール
セッションⅠ　「記号と写実」
セッションⅡ　「身体技法と祭祀芸能」
セッションⅢ　「民具と民俗技術」
セッションⅣ　「非文字資料の情報化と教育」

●海外提携研究機関　COE国際シンポジウム参加記
「世界文明論構築の新視野」 …… 王　勇
「非物質文化遺産研究との連携」 …… 王　暁葵
「人類文化研究の新しい天地」 …… 陳　勤建
「『非文字』と『非言語』のあいだ」 …… 村上　史展
「歴史の復権と非文字資料」 …… 許　南麟
「文化表現に対する理解」 …… 織田　順子
海外提携研究機関代表者懇談会

●プレシンポジウム「版画と写真」開催レポート

●同時開催　企画展示の紹介

■コラム　「開拓定住」を問う場としての北海道 …… 土田　拓

研究エッセイ

「非文字資料」と国際交流日誌 …… ジョン・ボチャラリ

フィールド・ノート

韓国全羅南道の旧神社跡地調査報告 …… 金　花子

海外博物館事情［オーストラリア］

多文化展示への模索 …… サイモン・ジョン

INDEX

No.11　2006年3月31日発行

巻頭言 …… 大里　浩秋
（外国語学研究科委員長・COE事業推進担当者）

ワークショップ報告　第1班公開研究会
「図像から読み解く東アジアの生活文化」

開催の主旨 …… 鈴木　陽一

『姑蘇繁華図』と『清明上河図』の比較
…… 戴　立強

蘇州における民俗生活の現状 …… 馬　漢民

仏画「甘露幀」にみる民俗演戯の諸相 …… 張　長植

都市図における風俗表現の機能 …… 金　貞我

研究エッセイ

屏風絵を読むにあたって—「江差桧山屏風」の読み取り体験から—
…… 田島 佳也

なぜ「道具」ではなく「民具」なのか …… 河野 通明

フィールド・ノート

韓国を少し知るヒント—自転車とオートバイ— …… 樫村 賢二

むらの風景が語るもの—世界遺産白川郷を訪ねて— …… 藤永　豪

海外博物館事情［ブラジル］

歴史変遷の象徴—サンパウロ市の2つのミュージアム— …… 菊池　渡

■コラム　日・中の民間芸能の比較—伝統の異なる変遷— …… 岳　永逸

■コラム　『民俗学誌（Folklore Studies）』について …… 王　京

No.12　2006年6月30日発行

調査研究から情報発信へ
—4年目を迎え大幅な組織改編—

成果の公表、発信にむけて
…… 福田 アジオ

●2006年度　課題別研究担当者
●課題別各研究の紹介
●組織図

8月開催　立命館大学・神奈川大学21世紀COEプログラム
ジョイントワークショップ「歴史災害と都市—京都・東京を中心に—」

災害像の構築にむけて—北原糸子氏に聞く—

立命館大学21世紀COEプログラムとジョイントワークショップ
…… 吉越　昭久

●プログラムスケジュール

研究エッセイ

租界と居留地に刻印された人間活動の営み …… 孫　安石

■コラム　日本における非物質文化遺産についての考察ノート …… 宋　俊華

■コラム　私の試みた、つたない「実験」 …… 刈田　均

海外博物館事情［デンマーク］

デンマークの野外博物館 …… 丸山　泰明

■コラム　手のひらが受け継ぐもの …… 本田　佳奈

No.13　2006年9月30日発行

展示を考える1

展示と体験 ・・・・・・・・・・・・・・ 榎　美香

観覧料という心的バリア・・・・ 浜田　弘明

第2回国際シンポジウムにむけて

図像・民具・景観
非文字資料から人類文化を読み解く
大里　浩秋／的場　昭弘／金　貞我／河野　通明／八久保　厚志／北原　糸子

●プログラムスケジュール

■コラム　アジア・ヨーロッパ・ラテンアメリカの情報発信（展示）の発達比較―日本から一番遠い国、ブラジルでは―
・・・・・・・・・・・ 大西　万知子

■コラム　忘れられない二週間 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 王　欣

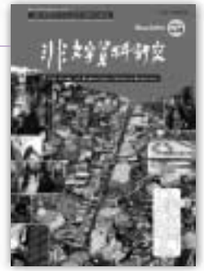
■コラム　中国の吉祥図案と日本の吉祥図案の比較研究 ・・・・・・・ 尹　笑非

立命館大学・神奈川大学21世紀COEプログラム

ジョイントワークショップを了えて ・・・・・・・・・・・・・・・ 北原　糸子

■コラム　インドにおけるフィールドワークの実践 ・・・・・・・・ 國弘　暁子

No.14　2006年12月31日発行



展示を考える2

博物館と体験学習 ・・・・・・ 佐々木　長生

「昔のくらし」の展示すること
・・・・・・・・・ 青木　俊也

第2回国際シンポジウム　開催レポート

第2回国際シンポジウムを振り返って
・・・・・・・・・・・ 大里　浩秋

●プログラムスケジュール

●第2回国際シンポジウムを「総括」する ・・・・・・・・・・・・・・・・ 中村　政則

●第2回国際シンポジウムを終えて ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 大西　万知子

●海外提携研究機関代表者懇談会

只見町・神奈川大学COE共催シンポジウム　民具は世界を結ぶ―人と自然を結ぶわざ―

●はじめに ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 佐野　賢治

●プログラムスケジュール

只見町の生業と民具―雪・山・川のつくる世界― ・・・・・・・ 佐々木　長生

中国農具研究の視座―農業考古学から民具研究へ― ・・・・・・・・・・・ 周　星

犂の比較民具学―東アジアの民族移動― ・・・・・・・・・・・・・ 河野　通明

生存からサバイバル文化へ―民具に見る継承の役割― ・ スチュアート・ヘンリ

■コラム　色彩認識の象徴化―京劇の臉譜の表すもの― ・・・・・・・・ 劉　渶氷

フィールド・ノート

中国東北部、旧満洲の旧神社跡地調査報告 ・・・・・・・・ 堀内　寛晃

■1班「『東アジア生活絵引』編纂」公開研究会報告

軒端の鞠―『絵巻物による日本常民生活絵引』のひとこま― ・・・・ 藤原　重雄

■コラム　東京の都市景観についての一考察 ・・・・・・・・・・・・・・ 陳　顥恩

■コラム　少女の絵姿から見た日本の「東西融合」 ・・・・・・・・・・・ 戴　嵐

No.15　2007年3月31日発行

Interview

中世鎌倉の景観を語る―私の発掘覚書―
・・・・・・・・・・・ 河野　眞知郎

研究エッセイ

『絵巻物による日本常民生活絵引』
マルチ言語版編纂における問題
・・・・・・・・・・ 君　康道

写真から人口現象を読み解く ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 平井　誠

フィールド・ノート

性とジェンダーをどうとらえるか
―人類文化における普遍性と特殊性の一事例研究― ・・・・ 國弘　暁子

■コラム　瀬戸内の小さな島で ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 香月　洋一郎

フィールド・ノート

変化しつつある文化遺産―広東醒獅の現状について―
・・・・・・・・・・・・・・ 彭　偉文

■コラム　野外民族博物館リトルワールドにおける「民族」概念についての初歩的レポート ・・・・・・・・・・・・・ フレデリック・ルシーニュ

■コラム　北斎を追って ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ディオゴ・カウパテス

■コラム　神奈川大学付近での考察に見られた日本の村落共同体
・・・・・・・・・・・ 劉　暁春

No.16　2007年6月30日発行

特集　公開研究会
「人びとの暮らしと生業―『日本近世生活絵引』作成への問題点をさぐる―」を振り返って

How to Use Pictorial Materials in Historical Studies 1
『日本近世生活絵引』の作成をめざして
―近世の北陸農村と松前地漁村の人びとの暮らしと生業― ・・・ 田島　佳也

How to Use Pictorial Materials in Historical Studies 2
生活絵引と菅江真澄 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 菊池　勇夫

How to Use Pictorial Materials in Historical Studies 3
「人びとの暮らしと生業」に参加して ・・・・・・・・・・・・・ 舟山　直治

How to Use Pictorial Materials in Historical Studies 4
鳥瞰の視線を考える
―『生活絵引』作成における歴史学、民俗学と美術史学の合流点をめぐって―
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 池田　貴夫

How to Use Pictorial Materials in Historical Studies 5
アイヌ民俗図資料の見方 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 児島　恭子

How to Use Pictorial Materials in Historical Studies 6
『農業図絵』にみる喫煙とジェンダー ・・・・・・・・・・・・・・ 長島　淳子

研究エッセイ

幻の「満洲国」建国神廟を復原する ・・・・・・・・・・・・・・ 津田　良樹

■コラム　「虹」と「市」 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 小野地　健

■コラム　キリスト教と現代日本人の生活 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 曹　栄

No.17　2007年9月30日発行

Interview 1
5班　実験展示班代表者　中村先生に聞く

実験展示班の企て
「あるく―身体の記憶―」について
・・・・・・・・・・・ 中村　ひろ子

Interview 2
6班　理論総括班代表者　的場先生に聞く

プロジェクトの総括にむけて ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 的場　昭弘

Interview 3
1班『日本近世・近代生活絵引』の編纂班代表者　田島先生に聞く

絵引作業の舞台裏 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 田島　佳也

研究エッセイ

都市景観「いにしえのソウル」の復元 ・・・・・・・・・・・・ 冨井　正憲

文久2年の「はしか絵」 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 富澤　達三

■コラム　鳥取県において民具調査を始めて ・・・・・・・・・・・・ 樫村　賢二

■コラム　「家族」と「故郷」 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 吳　毓華

No.18　2007年12月31日発行

第3回国際シンポジウムにむけて

場の記憶・からだの記憶
非文字資料研究の新地平
大里　浩秋／橘川　俊忠／佐野　賢治
中村　ひろ子／西　和夫／廣田　律子
前田　禎彦／山口　建治（司会）

●第3回国際シンポジウム　プログラム詳細

特集　若手研究者からのレポート

1. 日本非文字文化研究および保護の実践に関する調査研究
―神奈川大学COEプログラムと小澤昔ばなし研究所を例に―
・・・・・・・・・・・ 西村　真志葉

2. 武士道をめぐる私の2週間 ・・・・・・・・・・・・・・ ベネシュ・オレグ

3. 大学生の環境認識―自然地理学の講義現場から― ・・・・・ 藤永　豪

4. 煙突のなかの手紙 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 土田　拓

5. 図像学研究の課題 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 佐々木　弘美

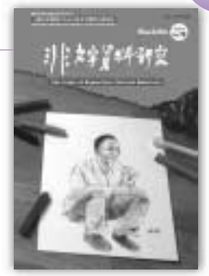
6. 『旅行雑誌（China Traveler）』について ・・・・・・・・・・ 王　京

7. 浮世の麗しい影―浮世絵の美人絵略論― ・・・・・・・・・・・ 衣　曉龍

8. 香港における日本のテレビドラマ ・・・・・・・・・・・・・・ 王　志垣

9. 上海で見た、“ものを運ぶ方法” ・・・・・・・・・・・・・・ 坂井　美香

No.19　2008年3月31日発行



ご挨拶　COEを振り返る

世界に、そして未来へ ・・・ 中島　三千男
（神奈川大学学長）

再びの幕開けに向けて ・・・・ 池上　和夫
（神奈川大学副学長・神奈川大学21世紀COEプログラム拠点形成委員会委員長）

訪問・派遣研究員によるレポート

1.「ベルダーシュ」―異性装から「異装」研究へ― ・・・・・・ 國弘　暁子

2. 日中民俗学交流のひとこま
―何思敬とThe Handbook of Folkloreの中国導入― ・・・ 王　京

3.「日本国図」から見た鄭若曾の日本認識 ・・・・・・・・・ 許　海華

4. 対照的な日本 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 唐沢　ダニエラ

5. 心はウチナンチュ ・・・・・・・・・・・・・・・・ グラウジョール・カルロス

6. 龍動と地震 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 蒋　明智

●COEメンバーリスト

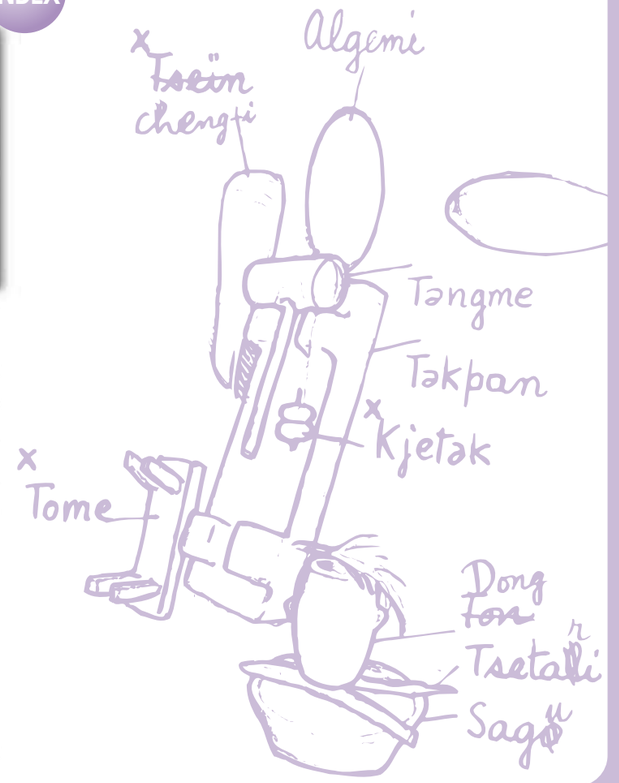
●COE刊行物リスト

●海外提携研究機関との若手研究者交流実績

●若手研究者業績

●第3回　COE国際シンポジウム　開催報告

●第3回　COE国際シンポジウム
プレシンポジウム　若手研究者ワークショップ
「手段としての『非文字』―資料と方法のあいだ―」を終えて ・・・ 王　京



受贈資料一覧（書籍・雑誌）

（2007年11月～2008年2月）

タイトル	発行所
●2002年～2006年　記録集	京都大学防災研究所21世紀COEプログラム 「災害学理の究明と防災学の構築」
●ニューズレター　No.10～No.11	九州産業大学21世紀COEプログラム 「柿右衛門様式陶芸研究センタープログラム」
●ニューズレター　No.11	近畿大学21世紀COEプログラム 「クロマグロ等の魚類養殖産業支援研究拠点」
●ニューズレター　No.2	慶應義塾大学グローバルCOEプログラム 「論理と感性の先端的教育研究拠点形成」
●「神女大史学」第24号	神戸女子大学
●ニューズレター　No.8～No.9	静岡大学21世紀COEプログラム 「ナノビジョンサイエンスの拠点創成」
●ニューズレター　No.25～No.27	東京工業大学21世紀COEプログラム SIMOT「インスティテューショナル技術経営学」
●Wind Effects News　No.17	東京工芸大学21世紀COEプログラム 「都市・建築物へのウィンド・イフェクト」
●画像史料解析センター通信　No.39	東京大学史料編纂所附属　画像史料解析センター通信
●第5回COEワークショップ論文集	東京電機大学21世紀COEプログラム 「操作能力熟達に適応するメカトロニクス」
●ニューズレター　No.7	同志社大学「一神教の学際的研究センター」
●ニューズレター　No.11～No.12 ●報告書　No.12～No.15	奈良女子大学21世紀COEプログラム 「古代日本形成の特質解明の研究教育拠点」
●ニューズレター　No.14～No.15	一橋大学21世紀COEプログラム 「現代経済システムの規範的評価と社会的選択」
●「科学技術動向」No.79～No.81 ●全体概要版「科学技術の状況に係る総合的意識調査（定点調査）」	文部科学省科学技術政策研究所科学技術動向研究センター
●「采風図」合巻　国立中央圖書館臺灣分館編	国立中央圖書館臺灣分館

主な研究活動

（2007年12月～2008年3月実施分）

研究推進会議

■第9回　12月19日・COE終了後の事業継承・発展計画について、事後評価とそれへの対応について、研究成果報告書・データベース進捗状況について、外部評価スケジュールについて　他

■第10回　3月　7日・COE終了後の事業継承・発展計画について、引継ぎ事項について、実験展示巡回展について、研究成果報告書・データベース進捗状況について、第4四半期予算執行について　他

全　体　会　議

■第5回　12月21日・COE終了後の事業継承・発展計画について、事後評価とそれへの対応について、外部評価スケジュールについて、研究成果報告書・データベース進捗状況について　他

■第6回　2月21日・COE終了後の事業継承・発展計画について、班・課題の研究成果要約について、データベース共通表記事項の変更について、最終研究成果発信に伴うホームページリニューアルについて、調査研究協力者の登録について、若手ワークショップ報告、第3回COE国際シンポジウムについて　他

研　究　会

全　体

■第5回　12月21日・堀内　寛晃　「『海外神社』跡地に関するデータベースの構築」
・上田　純広　「関東大震災・地図と写真のデータベース」構築に関する新手法
・西田　幸夫　「関東大震災の火災被害の可視化」
・孫　　安石　「租界とアジアデータベース作成の中間報告」

Symposium Report

第3回　COE国際シンポジウム　開催報告

「場の記憶・からだの記憶　非文字資料研究の新地平」

開催日程　2008年2月23日（土）・24日（日）

開催場所　神奈川大学横浜キャンパス16号館　セレストホール

国際シンポジウムは2005年、2006年に続き、今回は3回目ですが、これが本プログラムの最終シンポジウムとなります。第1回は、研究蓄積のある内外の研究者を招き、その研究法や研究成果を披露していただき、私たちが学び、第2回は、本プログラムの研究成果を中間報告しました。それに対して、今回は最終的な研究成果を報告して、内外の研究者に検討していただくという主旨の開催でした。

第1日目　2月23日（土）

9:30～10:00　（受　付）
10:00～10:05　開会挨拶
10:05～10:20　主催者挨拶

セッションⅠ　10:20～11:40
マルチ言語版『日本常民生活絵引』の編纂刊行

セッションⅡ　12:50～15:00
租界、神社の遺跡から過去の実態を読み解く試み

セッションⅢ　15:15～17:35
インターネット・エコミュージアムの可能性
―地域研究と情報学の連携―

17:35～17:40　閉会挨拶

第2日目　2月24日（日）

9:30～10:00　（受　付）

セッションⅣ　10:00～12:00
身体技法および感性の資料化と体系化

セッションⅤ　13:30～15:10
身体技法を展示する

15:30～16:30　総合討論（前半）
16:40～17:40　総合討論（後半）
17:40～17:45　閉会挨拶

海外提携研究機関代表者会議

レセプションにて

Pre-Symposium Report

第3回 COE国際シンポジウム・プレシンポジウム
若手研究者ワークショップ

「手段としての『非文字』―資料と方法のあいだ―」を終えて

王　京（PD研究員・ワークショップ実行委員会委員）

本プログラムは若手研究者の育成という目的のもと、各年度PD、RA研究員を募集してきた。我々は研究員としてそれぞれ各自従来の研究を続けながら所定の業務を完成し、プログラムの個別研究課題にも積極的に関わってきた。そして一丸となって自主的な研究活動を展開することをかねてから希望しており、海外派遣報告会など幾つかの試みもあった。いよいよプログラムがフィナーレを迎えた今年度、元・現任を含めPD、RA経験者を中心に日ごろの思考の一部を報告、議論し広く意見を伺う案が浮上した。先生や職員の方々の積極的なサポートを得て、若手研究者ワークショップは去る1月26日に開催された次第である。

本ワークショップのタイトルは「手段としての『非文字』―資料と方法のあいだ―」である。抽象的なことばを並べているが、意図するところは簡単である。「手段」とは、ここでは目標を達成させるための「ツール（Tool）」よりも、目的地に辿りつく「ウェイ（Way）」というイメージが近い。各自それぞれ格闘している「現場」に即して具体的な目的と、そのための「非文字」理解及び資料化の作法や効果などについて反省を行い、さらにその結果を持ち寄り議論する。このような作業を通して「非文字」の方法としての意味と、資料化するプロセスについて考えるのが我々の姿勢である。

セッション1「絵画を読み解く」では、場面を切取り再構成するか（彭偉文「記録手段としての絵画―『姑蘇繁華図』に描かれた女性を例として」）、構図の物語性を重視するか（佐々木弘美「絵画の構図をよむ―一遍聖絵の場合」）という着眼の違いがあるものの、ともに美術史的視点とは異なる、社会・文化・歴史資料としての絵画への読み方の可能性が提示された。

セッション2「フィールドで考える」においては、まず我々研究者自身が写真資料の生産者である事実に注意を払い、フィールド調査で撮影した写真を「群」として生活の構造及び変遷を提示する手法（土田拓「調査写真の性格と用法―景観の中のコンクリートブロック」）、或いはそれらを資料化するための基礎作業としてのキャプションの規格化（樫村賢二「調査写真の資料化―韓国のオートバイ宅配便調査を事例に」）などが提言された。そして社会調査によって言語に対する人々の評価を数値化して分析する可能性が示された（宮本大輔「非文字と言語―北京大学生の言語イメージを通して」）。

セッション3「博物館から展望する」では、モノと人と、その背後の精神世界や地域という場との関係に注目する展示の可能性（大西万知子「感性を展示すること―英国と日本の事例から」）、そして博物館そのものの性格が国民国家の表象から多様な文化的背景をもつ人々が交流し対話する場へと変わりつつある動き（丸山泰明「21世紀における博物館の可能性―北欧で考えた二、三のこと」）が指摘された。

ご自分の「現場」での経験を交え、懇切なコメントを寄せてくださった香月洋一郎、北原糸子、青木俊也の諸先生を始め、冬の寒い週末にもかかわらずわざわざご来場いただいた多くの先生や同学に心より感謝の意を表したい。皆様に暖かく見守られた中で我々のささやかな試みが充実した楽しい経験となった。

研究というのは我々にとって、個々の地道な努力と不断の反省は勿論、つねに仲間との横の交流と共同作業も必要とするものである。今回のワークショップで我々はようやく長い旅路への第一歩を踏み出したと実感している。

なお、当日の参加者は59名、内訳はCOE関係者29名、学内20名、学外10名であった。

COE調査研究協力者

本プログラムの調査研究活動を支援していただく、今年度のCOE調査研究協力者として追加委嘱された方です。

氏　名	所属部局・職名	所属課題班
泉　雅博　IZUMI masahiro	跡見学園女子大学・教授	『日本近世・近代生活絵引』の編纂

COE支援事務担当

●12月より下記の事務員が新しく加わりました。

佐藤　留実子
SATO Rumiko

主に経理業務を担当します。よろしくお願いいたします。

編集後記

この3月で5年間のCOEプロジェクトも終了、ニューズレターも本19号をもって最終号となります。このプロジェクトの紙媒体の業績に関して本号にページを割いて紹介しました。ここにニューズレター全号も示していますが、19冊の刊行の作業に協力いただいたすべての方に御礼申しあげます。（香月）

関さんから受け継いだバトンを無事ゴールに運べてほっとしています。ご協力いただいた皆さん、記念すべき最終号の表紙を飾って下さった西村さん、創刊号から最終号まで本誌デザインを担当して下さった町田さん、本当にありがとうございました！（藤本）

今回の最終号も、先生方や研究員の方々にご協力いただき無事発行することができました。なにより仕事を通じてたくさんの方々と交流を持てたことが一番嬉しく思います。短い期間でしたがありがとうございました。（関屋）